

# 未来を変える青き光 絶望との分岐点

パライソオタマ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

力の大会が終わり、皆が浮かれる中ベジータは別の時間軸を生きる息子、未来トラン  
クスの事を気に病んでいた。

あの時もつと力があれば…そんな事を思いつつ眠りについたベジータが目を覚ます  
と過去へタイムスリップしていた！

しかもただタイムスリップした訳ではない、それは未来トランクスの生きた絶望の時  
間軸の過去であつた…。

果たしてベジータはこの絶望の時間軸に希望をもたらす事はできるのだろうか…。

目

次

考察 番外編 その他

番外編？ ベジータの進化の軌跡

1

拓け未来！人造人間編

1 話

2 話 実力の確認

3 話 希望の確保

4 話 無謀な特攻

5 話 絶望と希望の分岐点

6 話 経由

7 話 決意

8 話 想い

33 30 26 23 18 12 8 5

8・5話 暗躍  
9話 開始

10話 次のステージ

11話

12話 進化の方向性

13話

14話 次の一歩

15話

乱戦！新ナメツク星編

2章 1話出発

2章 2話

2章 3話

2章 4話

82 78 74 71 68 64 56 53 48 43 40 37

3 章	2 章	2 章	2 章	2 章	2 章	2 章	2 章	2 章
魔人ブウ編	魔人ブウ編	魔人ブウ編	魔人ブウ編	魔人ブウ編	魔人ブウ編	魔人ブウ編	魔人ブウ編	魔人ブウ編
1話	14話	13話	11話	10話	9話	8話	7話	6話
接觸		次のステージ		ある魔術師の記録3				
128	124	117	114	111	107	103	98	94

3 章	3 章
結構先の話2	結構先の話2
編	編

147 143 139      135 132

# 考察 番外編 その他

## 番外編？ ベジータの進化の軌跡

- ・ Ⅱ 形態名 　　・ Ⅱ 覚醒理由や初お披露目時、形態の自分の解釈としてます。
- ・ 超サイヤ人1
- ・ 未来トランクス移動時から変身可能、逆に当時はこの形態にしか変身できなかつた。  
    ←
- ・ 超サイヤ人1－4
- ・ 悟飯と共に精神と時の部屋で修行した時に習得
- ・ 超サイヤ人でもより平常心を保った姿、燃費も通常のサイヤ人状態と変わらな  
いままに超サイヤ人1よりも強い戦闘力を発揮できる
- ・ 悟飯と共に精神と部屋で修行した時に習得  
    ←
- ・ 超サイヤ人2
- ・ 悟飯と共に精神と部屋で修行した時に習得

・超サイヤ人1の限界を超えた姿、超サイヤ人1はもちろん超サイヤ人1—4よりも遙かに強い。が、初めてなつたとき等は超サイヤ人1同様サイヤ人の本来の姿に近づくため凶暴性が高くなる

←

・超サイヤ人α（1／2）

・新ナメック星でメタルクウラ及びビッグゲデスターを殲滅した後、新たなナメック星の最長老ムーリにより潜在能力を開放して貰った時に到達した境地の一つ

・形態的にはドラゴンボール超の映画、神と神でビルスにベジータが立ち向かった時の形態のなり損ない。完全な形態では無いが超サイヤ人2の時より圧倒的に戦闘力が上昇している。

・名称については原作では「めちゃやめちゃすんげーサイヤ人」としか称されていなかつたのでなんとなくでつけました。

←

・超サイヤ人α

・魔人悟飯との戦闘開始の時に見せたベジータの形態。

・上記説明の通りビルス初戦闘の時のベジータの形態、しかし原作と違いこのSでは界王神界での長きに渡る修行、そして予め超サイヤ人α（1／2）を習得してい

たため平常心は保ててている。

←

- ・超サイヤゴッド

- ・超サイヤ人ゴッドキヤベとの戦闘中に覚醒

- ・6人の正しき心を持つサイヤ人が1人のサイヤ人に注ぎ誕生するサイヤ人の神の形態。この s s では力を注いだサイヤ人もその場ですぐなれる訳ではないが超サイヤ人ゴッドになる素質を得られると設定しております。

←

- ・超サイヤ人ゴッド超サイヤ人

- ・第六宇宙との親善試合でキヤベとの戦いで初お披露目となる。

- ・超サイヤ人ゴッドの力を持つサイヤ人の超サイヤ人ゴッドの超サイヤ人の姿、髪や気が青色に染まる。

←

- ・ S S G S S 2

- ・第六宇宙との親善試合でヒットとの戦いで初お披露目となる。

- ・上記の超サイヤ人ゴッド超サイヤ人の限界を超えた境地。青き光の輝きが増している

←

- ・ 破壊神ベジータ
- ・ 別時間軸（漫画版ドラゴンボール超の i f 時間軸）からやつてきた何千何万もの合体ザマスにより倒されたビルスから破壊神の力を託され至った形態。
- ・ 見た目は超サイヤ人1や $\alpha$ のように見えるが放つ気の色に禍々しい紫色が薄つすら混じっている。

# 拓け未来！人造人間編

## 1話

力の大会に優勝した第七宇宙、消滅した他の宇宙も復活しブルマ宅でその祝勝パーティーが行われた

フリー・ザを除く全ての戦士がパーティーに参加しパーティーは盛大に盛り上がった。ハッピーエンド、パーティの参加者全員がそう思う中ただ一人今の状況に満足の行かない者がいた

「…クソツタレ」

ベジータである。

彼も始めはこのハッピーエンドを堪能する側だった、弟子との約束も果たせ、最愛の妻と息子、そして大会直前に産まれた娘との再会も果たしライバルとの全力の再戦も果たせた。

しかしここまで優しくなった彼だからこそ引っかかるものがある

別の時間軸を生きる息子、未来のトランクスである

「もしあの時今の力があればトランクスの宇宙は消えずにすんだはずだ！」

あの時もつと強ければ、トランクスにあんな思いは…。」

力の大会が始まる前、ある神との戦いの末、未来のトランクスの世界は消滅してしまった。

最終的に彼は別の時間軸の世界で生きることなつたが、彼の守ってきた者達、受け繼がれる意思は全て無かつた事になつてしまつたのだ。

トランクスの事を気にかけてしまい、結局モヤモヤしたままパーティーを終え、ブルマと熱い一夜をすごし眠りについた：

「ベジータ!! アンタいつまで寝てるつもりなの? そろそろ起きなさい」

「ふおっ!?」

妻の声で目が覚めたベジータ、しかし昨日色々あつてか自分の身体とは思えないほど怠い、妻には悪いが二度寝する事に：

「いくら孫くんが死んじやつたからつていつまでもそんなんだと人間として腐るわよ!! 解つたらいい加減起きなさい!!」

「カカロットが死んだ!!」

飛び起きて声のした方、つまりブルマの所へすつ飛んでいき反射でつい胸ぐらを掴んでしまつた

その時ベジータはある違和感に気がついた。

若い、10～20歳程若返つてゐる。明らかに昨日の夜のブルマとは圧倒的に肌のはり、艶がいい。

そんな事を考へてゐる内に胸ぐらをつかまれたブルマが口を開く

「ちよ、ちよつと！ そんなに怒らなくともいいじゃない！ それに今はぼーっとして、アンタ何か変よ？」

ブルマの声でハツと我に返り手を離す、混乱しながらもブルマに質問する

「す、すまなかつたなブルマ、ところで今は何年何月何日か解るか？」

「ちよ、ちよつと本当にどうしちやつたのよベジータ、今はエイジ767年、Mの11日よ？ アンタ、変なものつまみ食いでもしたんじやないでしようねえ？」  
妻の言葉でベジータは確信した、自分が過去に来た事、そして

「この時代は未来のトランクスが過ごした絶望の歴史である事に！」

## 2話 実力の確認

「ハア…ハア…クソッタレが！」

宇宙船を改造した重量室の中、ベジータはまず自分の実力がどの程度かの確認を行つていた

「ブルーはおろかスープーサイヤ人2にすらなれん、身体が怠く重かつたのは昨日の疲労からではなく戦闘力の低下…いや戦闘力の低い身体になつたからか。」

「精神と時の部屋に入れば恐らくスープーサイヤ人2には簡単になれるだろう、なる感覚は覚えているからな。しかしゴット、ブルーとなると……。何か大きなキツカケが欲しいものだな」

「そして、他の問題はやはり魔人ブウか。期間を考えるとスープーサイヤ人3になるもしくはならずともそれに近い戦闘力になるのは簡単だろう。しかし相手が相手だ、不測の事態も…想定せねばなるまい」

「今之内に魔人ブウの入つた玉を壊すの…は可能だがそれではいかん。何とか魔人ブウを倒…して界王神とのコネをつ…くらねば」

「界王神と…のコネを作ればビルス…それが無理で…もウイスとは、接触が…でき

……クハツ……！何だこの疲労感は!!』

ベジータが先の事を考察していると身体に違和感を感じた、力がどんどん抜けて行きガス欠になるような感覚、そしてベジータは気づいた

(そりやかー！スーパーイヤ人2にすらなれん事で薄々感づいてはいたが肉体も当時の物になつていてる！ついいつもの癖でスーパーイヤ人のまま過ごしていたが当時のオレでは負担に耐えきれん！)

(更に今朝のブルマの言葉が事実ならこの時代のオレはカカロットが死に、モチベーションが下がつてろくな修行すらできていらない可能性もある。そんな身体でスーパーイヤ人を維持するのは不可能！)

「ハア、ハア……クソツタレ！こんな身体が自分の身体だと思うとヘドが出そうだぜ!!」  
ベジータは急いでスーパーイヤ人を解き、重力装置のスイッチを切った

「このままでは話にならん、とにかく休憩をはさみつつスーパーイヤ人の状態を維持できる時間を伸ばさねば、そして長時間スーパーイヤ人を維持できる程度にまで戻せたら精神と時の部屋に入るとするか」

ベジータは夜まで重力室に籠りスーパーイヤ人の状態をキープする訓練を行い家に帰宅した

「ふう……流石に一朝一夕では大して変わらんか、今すぐにでも精神と時の部屋に籠り

たい所ではあるがあるが程度のレベルまで達してからでなければ伸びしろが落ちる可能性がある。チイ、日数制限さえなければ

そなほやきながら自分の部屋へ向かう途中赤子の泣き声が聞こえた。

声の場所へ向かつて見るとブルマが赤子のトランクスを必死にあやそうとしていた（この時代だとブルマはまだ赤子をあやすのに慣れていないようだな…仕方ない）

「かせ、ブルマ」

「べ、ベジータ！あんた帰つて来てた…の…、…!?」

「どうした、トランクス…この泣き方は…飯だな！哺乳瓶と粉ミルクは今の時代と変わつてなければこの辺に…おお、あつたか」

ブルマは硬直した、目の前の光景が理解できなかつた。暫く放心状態になり、その後意識を取り戻し…パニックを起こした

「べ、べ、べ、ベジータ!!!あんたどうしちやつたの?!え?…解かんない…待つてえ?!どうしちやたのよ!?!」

「もしかしていきなりまたハードな

トレーニングをして脳みそ壊れちやつたの!?!」

「いや、まつてそう言えば朝から様子が変だつたし…。うそ?!ベジータ、あんたもしかして死ぬの?!え、えつ、え!」

「お、落ち着けブルマ、俺は王子だつたと何度もいつてただろ！……子供の教育ぐらい教わっている。たまには……」

ベジータはブルマを落ち着かせようとしたが結局ブルマは気絶してしまった、仕方なくトランクスにミルクを与えあやした後にブルマをブルマの寝室に寝かせ一日を終えた

「…くっ、筋肉痛がこんなにも…全く情けない身体だぜ…。一体今は何時…!?もう昼間じやないか!?!クソツタレ！今は時間が惜しいっての…！！」

ベジータは昨日の修行だけで筋肉痛が酷い事と疲れで昼間まで寝てた事に怒りを覚えていた、しかしそれを吹き飛ばす出来事が起こった

「大きな気が全くない所から今の俺を超える戦闘力分のエネルギーの爆破！これは！」

ベジータの感じとったエネルギー、それはベジータが過去に戻る前に共に力の大会を戦い抜き、

未来のトランクスの初めの絶望を与えた  
人造人間の放つエネルギーであつた！

### 3話 希望の確保

ベジータはまずピッコロの所へ向かった、幸運な事にピッコロと悟飯が二人揃つて爆心地、つまり人造人間の所へ向つてゐるようだ

（万が一誰かが死んだ場合悟飯以外はナメツク星のドラゴンボールでなければ生き返れない。ここでピッコロに死なれるとドラゴンボールを使い新たなナメツク星の位置を知ることが事が出来なくなってしまう）

（幸運な事に悟飯も一緒の様だ、とりあえず二人には神殿で待機させるのがベストだろうか？こうなつてしまつたからにはすぐ精神と時の部屋を使うしかあるまい）  
そんな事を考える内にベジータはピッコロ達と空中で合流する

「おい、ピッコロ！悟飯！そこで止まれ！」

「ベジータか、どうやらお前もあるの不思議なエネルギーを感じた様だな。だが何故わざわざこちらに合流して來た？貴様の事だ共闘しようなんて事を言うガラではなかろう、要件は何だ？」

「もつともサイヤ人何かと共に闘なんてのは死んでもごめんだがな？」

「フン、何とでも言え。だが貴様らに死なれては困るんでな。言つておくが向こうで暴れている奴らは今の俺ですら勝てん。そんな奴が二人もいるんだ！ 貴様らでは絶対に勝てん、が策はある。だから貴様らは神殿に向え！」

「サイヤ人の王子ともあろう奴がえらく弱腰だな、どうやら敵の情報を知つている様だが貴様の指示に従う気も無ければ今暴れている奴等に遅れを取るほど弱いつもりもない。行くぞ悟は ドガツ!!!」

「ピツコロさん!! : クツ！」

無視し先へ進もうとするピツコロをベジータが腹パンで気絶させる、意識を失いベジータに倒れ込むピツコロを見て悟飯は構えをとつたが

「安心しろ悟飯氣絶させただけだ、お前達を死なす訳にはいかんからな。先程言つた通りこいつを神殿に運ぶ、こちらにも事情があるんだ納得できんかも知れんがついてきてくれ。」

悟飯が今まで見たこともないようなベジータの優しい顔、そしてベジータから感じる氣も少し前とは別物のように穏やかに感じる。

そんなベジータを数年前に死んだ父の面影を感じ悟飯はベジータの指示に一時的に従う事にした。

ピツコロを担ぎ神殿へ向かうと表にはMr. ポポと見慣れない老いたナメック星人

の姿が見えた。とりあえずベジータはそこへ向かい降りる事にし、悟飯もそれに続いた「ピツコロを止めてくれた事を感謝する、もしピツコロがあの者達と戦つていれば確実に命を落としていただろう」

「ナメック星人の様だが、貴様は一体何者だ？」

ベジータはその老いたナメック星人に質問をする

「そう言えばお主とは初対面であつたな、ワシは地球の神であり。ピツコロの半身の様な存在じゃ」

(ナメック星人は同化する事によつて戦闘力を大きく上げる、ピツコロの奴があの時オレを一時的に越えたのはこのナメック星人と同化したからだつたのか)

ベジータがそんな事をを考えてると悟飯がある事に気づいた

「誰かの気が…とても小さくなつて、この気は、天津飯さん!!」

仲間が死にかけている事に気づいた悟飯は急いで天津飯のいる所へ飛ぼうとし、ベジータが悟飯の服を掴んでそれを阻止する

「離して下さい！早く、早く行かないと天津飯さんが死んでしまいます！天津飯さんだけじやない、天津飯さんのそばにある氣：クリリンさん、ヤムチャさん、チャオズさんも！」

「落ち着け悟飯、貴様が行つた所で死ぬだけだ！」

「それでも僕は、僕は、もう誰かが死ぬのは見たくない！」

「俺があいつらを助け出す、必ずだ！」

「！」

悟飯は驚いてベジータの顔を見る

「誰も見捨てるとは言つてない、お前が行くより俺が行く方が助けられる確率は高いはずだ。だからここは俺に任せてくれ」

「かと言つてここで待ちっぱなしもあれだろう、だからお前のママとトランクスと…ブルマをここに連れてきてくれ、ここは恐らく地上より安全だろう、頼めるか？」

「……解りました、クリリンさん達を頼みます！」

そう言つて悟飯は飛び立つて行つた

「……さて、俺も行くか」

南の都南西9キロの町、そこは既に人造人間によりビルは倒れ、家々は燃え、まるで地獄の様な景色へと変えられていた。

そんな町を一人の男が走る

「くそッ！こんなアリカよ…」

「ほらほら！しつかり逃げろよ、捕まつたらそこで寝かしてると一緒に死んでもらうぜ？これはゲームだ俺を楽しませてくれよ？」

17号は遊ぶ様にクリリンへ遅く避けやすい、その代わり高威力の気弾を放ち続ける。天津飯、ヤムチャ、チャオズは既に気絶しており3人纏まって18合流の足元で横たわっている

「チクショウ、悟空さえもし生きていたら…うわあ!?」

自分の足元付近に着弾した気弾の爆風にふつ飛ばされ地面に叩きつけられるクリリン、急いで起き上がる頃顔を上げると目の前に17号が立ちはだかっていた

「ふんまあ生身の人間だしこんなものだろう。それなりの暇つぶしにはなったかな?じゃあそろそろ死のうか」

目の前でエネルギー弾を溜める17号、クリリンが死を覚悟したその時17号を何者かが蹴り跳ばす。不意を突かれた17号はビルの瓦礫を突き抜け遠くの方へ吹っ飛んでいった。

突然の出来事に驚き硬直する18号、彼はその隙を見逃さず強力な気弾で遠くへふつ飛ばした。そして僅かな時間を確保する事に成功した彼はクリリンに自分氣を少し分けて蘇生させる

「はは…まさかお前に助けられるとはな、ベジータ」

「…俺が時間を稼ぐ、その隙に3人を担いで逃げろ」

「え…!」

「グズグズするな！時間が無いんださつさと行け!!」

「す…スマンベジータ！」

そう言うとクリリンは急いで3人を担ぎ街から離脱した、そして…：

「フン、人がせつかくゲームを楽しんでいたのに邪魔するなんて感心しないねえ」

「お前が俺たちのおもちゃを逃したんだ、今度はお前におもちゃになつてもらうぜ、もちろんさつきの奴らより楽しませてくれるんだろう？」

「…フン。」

(まさか人造人間達とこんな形で再戦する事になるとはな)

体調が優れぬ中、クリリン達を助けるために二人の悪魔と対峙するベジータ。果たしてこの絶望的な状況を凌ぎ切る事ができるのだろうか、ベジータの命運やいかに

## 4話 無謀な特攻

「ほらほらどうした！ 守ってばつかじや俺は倒せないぞ」

「……くつ！」

17号の連續打撃を受け流し続けるベジータ、

力の差に押され中々反撃に出れないよう見える…が

(：スピード、威力は確かに今の俺の上を行っている。おまけにどうやらまだまだ実

力を隠してる感じだな)

(しかし動きの流れは読める、身体は弱くなつてはいるが踏んできた実戦経験は流石にこちらの方が圧倒的に上だ。それに相手もまだ遊んでいるもうしばらくこの状態をキープできるだろう)

(相手の攻撃を受け流しながら気を溜め続け、俺が防ぐので精一杯と思わせ油断を誘い気が限界まで溜まつたらバリアーを貫通する威力で全力の一撃を放つ！)

(受け流すのをしくじれば死、相手に飽きられ全力を出されても死、今のスタミナ的に一度でも溜めている気を崩されても死。厳しい状況だがやるしかない！)

「あーあ暇で仕方ないよ、17号も遊んでないでさっさと殺しちゃええばいいのにさ。

そもそもさつきはあんたが遊んだんだから今度は私の番だろ。この埋め合わせは後で絶対してもらうからね」

不満げにぼやく18号だがもう暫くは大人しく見物していくれそうである  
「確かに全然攻撃してこなくてつまらないな、もしかしてスタミナ切れでも狙つているのか？」

「だつたらいい事を教えてやる、俺たちは人造人間でなスタミナは永久に減らないんだ」

「何!？」

知つて いるがあえてベジータは驚いて見せた。すると狙い通り17号はその顔を見て邪悪に笑い攻撃を止め得意気に話しだした

「はつはつはつはつは、どうやら図星だつたようだな！今のお前の顔は傑作だつたぞ？そんな可愛そうなお前にこいつをプレゼントしてやろう」

軽く上空に飛び手にエネルギー弾を溜める17号、しかし調子に乗り油断しきつてい るためか大した威力では無さそうである

（こちらの気もだいぶ溜まつた、恐らくここが最初で最後のチャンスだろう…、ここで 決める！）

ベジータはこのすきに全身で溜めた気を大部分を両手に残りの少量を足に移動させ

ておく

「こいつで終わりだ!!」

そして17号はエネルギー弾を放つた、やはり威力も速度もそれなりにあるがとてもベジータを倒せるものでは無かつた

ベジータはエネルギー弾が放たれると共に17号へむけて跳躍し、舞空術でエネルギー弾を避け一気に17号の目の前まで距離を詰める

「何だと!?」

意表を突かれ驚く17号、しかしもう遅い

「すきありだ、ファイナルフラツシユ!!!」

凄まじい光に飲まれる17号、急いでバリアーレをはつたがすぐに碎け散つてしまいどうする事もできなくなつていた

あと少しで押し切れる、そう思つたその時

「……! もう力が抜け、スーパーサイヤ人が…解ける」

溜めた気が足りなかつたせいか、それとも昨日の疲労のせいか黒髪の状態に戻つてしまい地面に落ちるベジータ。それによりファイナルフラツシユの威力も落ち17号に脱出されてしまう

「はあ…はあ…今のは、死ぬかと思つたぞ」

「あーっはっはっはっは！ ちよつとなにやつてんのさ17号、今のあんたすつごくダサかつたよ。服までボロボロにされてさ」

「俺を油断させ一気に倒す作戦だつたのか、じやあ今までのは全部こいつの手のひらの上。……ふざけやがつて！！」

ドムツ！ 「あがあ：ツ!!」

怒り狂つた17号に蹴り飛ばされ遠くのビルに叩きつけられる

「今度は油断しない、正真正銘全力の一撃で粉々にしてやる!!」

「…ぐう」

身体中の骨が折れ、どこかの内臓も潰れているようだ。薄目を開けると強い光が見える、恐らく自分を殺すためのエネルギー弾だろう。しかし身体は動かない

（くつこれまでか、せめてどちらか片一方でも倒せればと思ったがどうやらまた俺は無力だつた様だ。しかしこれであいつらは無駄死にする事はなくなつた）

（戦士は大勢生き残りドラゴンボールもある。人造人間以外にも脅威はいくつかあるが仲間がいればあいつらは乗り越えれるはずだ、オレの子とカカロットの子だからな）

（これで未来は少しでも、）

一違う！－

（このオレともあろうものが何を考えている！トランクスの未来を自分で救いたい、

そう願つたのはオレ自身じやないか！）

（生きねば、必ず生き残らねば！未来はオレが変え…）

必死に避けようと身体を動かそうとするベジータ、そんな彼を眩しい光が包んでいく。その光景を見ながらベジータは意識を手放した

次回

ラディツツ死す！恐るべきバイオマン

無念、全然話題にならないターブル

放てザマス！たつた一人の元気玉の3ぼ…ぼぼぼぼ…ぼ

## 5話 絶望と希望の分岐点

「…ハツ、ここは何処だ!?」

ベジータが目を覚ますとあまり見慣れない部屋の寝室で眠っていた事に気づいた。そして身体の傷も全て治っている、恐らく誰かが仙豆を与えてくれたのであろう

状況を把握できずボーッとしていると部屋に誰かが入ってきた

「ベジータ、目を覚ましたのね!あたしすうつごく心配したんだから。ちゃんと後でクリリン君にお礼言つときなさいよ。あ、待つて皆を呼んでくるから」

「おい、待てブルマ!クリリンがつてどういう事だ、説明していけブルマ!!」

結局ブルマは皆を呼びに行つてしまい何故この状況になつたかは解らずじまいに終わつてしまつた

：ベジータが意識を失う数秒前、それは刹那の出来事であつた

「お前達の相手は俺だ!こっちを見ろー!!」

突然の大聲でとつさに声の方向を見る人造人間、そこには先程逃げた小柄の男、クリンが立つていた

人造人間達の視線が自分に釘付けになつてゐる、今しか無い

「太陽拳!!!」

「…！クソツ、何だこの光は!!」

「きやつ、眩しい！」

クリリンの太陽拳に怯む人造人間達、チャンスは今しか無い

「ベジータ、今助けるぞ！」

「チクショウ、逃してたまるか！」

急いでベジータを担ぎ上げ逃げるクリリン、17号はそれを逃がすまいと溜めたエネルギーを辺りに乱射するが気を探れないため大半が的外れな方向へ飛んでいったためクリリンは逃げる事ができた。

「くっそー、どいつもこいつも俺を馬鹿にしやがって！18号、次の街へ行くぞ。憂さ晴らし人間共を徹底的に苦しませて殺してやる!!」

「ちょっと、いつまであんたの番なのさ。いい加減私の番をよこして少しは頭を冷やしな、あれは油断しきったあんたが悪いよ」

「それにしてもあのチビ、ただの雑魚かとおもつたけど結構やるじゃない、逃げた癖に仲間助けるためにわざわざ戻つてくるなんてさ」

逃げ切ったクリリンはピッコロ、悟飯の氣がある神殿へベジータを運んだのであつた

…。

しばらくするとベジータの寝ている部屋に悟飯、ピッコロ、天津飯、クリリン、ヤムチヤ、チャオズ、ブルマ、チチが入ってきた。

「…さて、話して貰おうかベジータ。あいつらが何者なのかを」

「天界でお前の戦いぶりを見ていた、確かに俺たちとは次元が違っていた。それをなぜ事前に知っていたか、全て話してくれないか」

ベジータ。

少し考えているとベジータはある事に気づく

「しかし貴様!!」

「おい少しまで、まず先に一つ聞かせてくれ。ピッコロ、気の質が変わっているが…もその言葉のもう一つの意味、すなわち  
—地球のドラゴンボールの消失であつた—

## 6話 経由

「ピツコロ！自分が何をしたか解つていいのか」

ベジータは怒り心頭にピツコロの胸ぐらを掴む。

「戦力を確保したまでだ、正直お前が生き残れるなんて思わなかつたからな。お前が死んでいたらあの二人に勝てるよう成長する見込みがあるのはオレと悟飯だけだからな。」

「それにドラゴンボールがあつた所で貴様も孫も生き返らない、そしてオレが死んだ時点でドラゴンボールは消滅する。だからドラゴンボールより戦闘力の上昇の方が必要だと判断したまでだ。」

ピツコロはベジータに淡々と答える、しかしふじータは納得できず怒りのボルテージがさらに上昇する。

「ドラゴンボールで新ナメック星の場所を探しだせば一度死んだやつでも生き返れる事ができたんだ！それに俺たちが修行してる間にも地球の連中は大勢死ぬ、お前の軽率な判断で多くの生き返れた命が死んだままになるんだぞ！」

周りはベジータの発言に信じられず驚きざわめく、確かに当時のベジータなら絶対にこんな事は言わなかつただろう。そしてピッコロはベジータにこう返す。

「そう慌てるなベジータ、神は界王のやつとテレパシーで通信ができた、当然その能力は俺にも受け継がれている。だから新たなナメック星を捜索する事は可能だ。」

「な…!」

ベジータも知らなかつたピッコロの能力に思わず声が漏れる。

「さて、じやあそろそろ答えて貰おうか。奴らは何者なのか、どうやつて奴らの情報を得たか」

ベジータは自分が未来トランクスの時間軸から来たという事にして話した、敵がドクターゲロが孫悟空への復讐のために作った人造人間である事、その人造人間に悟飯を除く全ての乙戦士が殺された事、悟飯が数年もの間トランクスを鍛えたつた一人で何度も人造人間に挑んだ末死んだ事、そして自分のトランクスが人造人間を倒し皆の仇を討つた事を。

そしてベジータはあえて嘘の歴史を混ぜた。

一つはベジータは本来未来トランクスの時間軸では人造人間との戦いで死亡したが、自分が未来トランクスの時間軸から来たという事にするため、『自分は人造人間との戦いで死にはしなかつたが脊髄をやられ戦えない身体になつたが生きていた』という事に

した。

二つはベジータが魔人ブウという人造人間より更に強い敵に世界が滅ぼされ気がついたら過去のこの世界で目が覚めたと言う事にした。未来トランクスの時間軸では魔人ブウの復活は阻止でき、世界が滅んだ原因はザマスと全王であるが今その情報を与えるとタイムマシンの事などで話しがややこしくなるのでそれを防ぐためである。

「にわかには信じられないが、今の状況を考えると信じざるをえないな」

「それにしても俺たちが死んじやつたせいで悟飯に辛い思いをさせちゃつたな」

「俺は年月がたつたとはいっても丸くなつたベジータに驚いたけどな」

話しを聞いてそれぞれ感想を述べる天津飯、クリリン、ヤムチャ、そして丸くなつた所に触れたヤムチャにはベジータから凄まじい睨みが送られた。

「未来ではとても大変な事になつていたんですね、ピッコロさんはどう思いますか？」

ピッコロに感想を求める悟飯、それに対しピッコロはこう放つた

「…ベジータはいくつか嘘をついている、だがその嘘と思われる言葉を話している時悪意は感じられなかつた。恐らく混乱を招くのを防ぐため部分部分をはぐらかしたのだろう。」

「俺達の未来を滅ぼした魔人ブウとやらも気がかりだがまずは目先の人造人間だ。神殿に俺達を集めたと言うことは精神と時の部屋を使うんだろう？」

周りの皆はベジータが嘘をついていることに一瞬動搖したがそれが善意である事を知りほつと胸を下ろす。

「話が早くて助かる、精神と時の部屋の説明は後にするとしてまずピッコロと悟飯、お前達に先に12時間はいつてもらう。基礎戦術の向上と戦闘力の底上げのためにな。」

「そして次に俺と悟飯が12時間精神と時の部屋に入る。スーパーサイヤ人のコントロール、戦い方を鍛えるためにな」

「次に…「ちょっとまつてけろ！」

ベジータの話を遮り、意見する者がいた。

「悟飯ちゃんに戦わせるつもりだか？ そんなのみとめねえべ！ だつて悟飯ちゃんベジータさの歴史では死んじまつたんだろ、おらは悟飯ちゃんにそんな危険な目にあつて欲しくねえべ！」

「悟空さに先立たれてしまつたのに悟飯ちゃんにまで死なれちまつたらおらは、おらは……。」

ベジータの言葉を遮つたのは悟飯の母、チチであつた

## 7話 決意

(…迂闊だつた、危機感を持つてもらうため悟飯の死を伝えたがチチの前では刺激が強すぎたか！)

ベジータを含め全員が沈黙する、悟空が死んだ時の悲しみに暮れたチチの姿を見ていたこの時代の乙戦士達もチチの辛さが理解できていたからである。

しばらく沈黙が続いたがついに一人が声を上げた。

「お母さん、僕に修行をさせて下さい！」

悟飯である。

「お母さん、僕はこの戦いが終わつたら今までよりたくさん勉強して必ず立派な学者になります！だから今度も目を瞑つて下さい。」

悟飯は自分の強い意志を見せ、学者への志がしつかりある事が伝わればきっと納得はしなくとも見逃してくれる、そう思つていた。

「……、悟飯ちゃんならそう言うと思つていたべ。ナメック星へ行つちまつた時もしつかり帰つてきてくれただもんな。」

「じ、じやあ！」

「……、でもすまねえ悟飯ちゃん。おら悟空さが死んじまつてから失う怖さを覚えちまつたんだ。本当は悟飯ちゃんを信じて行かせてやりてえ、でもどうしても心の不安が消えてくれないだよ。」

「おらは母親失格だ、それでももうおらは何も失いたくねえだ。だから：行かないで……。」

悟飯の説得も失敗し涙を流すチチを前にもう誰も何も言えなくなつてしまふ。しかしこのままでは埒が明かないと判断したピッコロが動く。

「…すまない、ここもずっと安全とは限らんのだ行くぞ悟飯。」

そう言い、悟飯の手を握り精神と時の部屋へ向かおうとするピッコロ、そしてチチはそのピッコロの前に立ちふさがる。

「…、どいてくれと言つても退いてはくれないか」

「当然だ、どうしても悟飯ちゃんを人造人間と戦わせるならおらを殺してから行け！  
脅したつてひかねえぞ、おらは悟空さと結婚すると決めてから色々な覚悟はもう済ませただ！」

「悟飯ちゃんの死を知るくれえだつたらおらは先に死んだほうがましだ!!」  
ハツタリではない本当の覚悟をした目でピッコロの目をじつと見るチチ、それに対し

ピッコロも真剣な目でチチに言う。

「誰も悟飯を人造人間と戦わせるとは言つてない、人造人間なんぞ俺とベジータで十分だ。」

「だが万が一俺とベジータが倒されれば先程ベジータが言つていた結末と似たような歴史になつてしまふと思つただけだ、つまり悟飯がたつた一人で苦しみ死んでいつた無残な歴史にな。」

「俺は悟飯をベジータの歴史の悟飯のようにしたくない、だから戦いに行く前に悟飯に俺の戦い方、意志を遺したいだけだ。」

「もしお前がベジータの歴史の悟飯の死を犬死にしたいならそのまま立つていろ、最も俺はそんなのはゴメンだがな。」

ピッコロの言葉を受け、その場に座り込むチチ。それを見たピッコロはそのまま悟飯と共に精神と時の部屋へ入つて行つた：。

## 8話 想い

ピッコロが悟飯と共に精神と時の部屋に入つた後、ヤムチャがチチを慰め、クリリンが念のため亀仙人を神殿に連れて行くためにカメハウスに向かい、天津飯とチャオズが軽い組手をしていた。

そしてベジータは…。

(……、トランクス。)

神殿の寝室で眠るトランクスをただただ眺めていた。

(ピッコロには悟飯の基礎戦闘力の向上を主に訓練を頼んだ。12時間、つまり半年でどこまで伸びるかが鍵だがピッコロならば大丈夫だろう、単に戦闘力を上げるだけなら恐らく悟飯にはピッコロが適任だろう)

(そしてもう12時間精神と時の部屋で俺が悟飯にスーパーサイヤ人の訓練をすれば恐らく俺も悟飯も人造人間はもちろんあわよくばセルを超える戦闘力に仕上げれるだろう)

(この時点でも未来はかなり良い方向に変わるはずだ。)

「…トランクス、できる事ならお前に降りかかる困難はお前の手できり開けるよう

育つて欲しかった。サイヤ人の親としてな。」

「だがそれでお前の全てが奪われてしまうなら話は別だ、お前の未来をもう二度と閉ざさせたりはしない！もつとも今のお前はこんな事を聞いても何も解らんだろうがな。」

（フン、俺がここまで地球に染まるようになるとはな。さつきのチチと同じような気持ちを持つなんてフリーザのヤロウの下にいた時は想像もしなかつただろよ）

「さて、俺も少し休むとするか。悟飯を鍛える時に疲労で動けないなんて事になれば話にならんからな。」

ベジータはトランクスの眠るベッドの脇に座り、そのまま眠りについた。

朝になり目を覚ましたベジータ、時計を見る限りあと2、3時間で悟飯達が出てくる時間になるだろう。

神殿内をうろつき、ミスター・ポポを見つけ食事の場所を聞き手早くかつ大量の食事を平らげた。そして。

「おい、クリリン、ヤムチャ、天津飯、チャオズ！」

神殿の表へ行き外でトレーニングをしていた乙戦士達に声をかけた。

「ん？どうしたんだベジータ。」

真っ先に反応するクリリン、それに対しベジータが答える。

「もうすぐ悟飯達が精神と時の部屋から出てくるだろう、それまでに軽く運動がしたくてな。組手の相手を頼めるか？」

「俺は別に構わないぜ、それにしても何かベジータの口調がここまで優しくなると何か調子が狂っちゃうな。おつと少しは手加減はしてくれよ。」

「貴様らサイヤ人何かと手合わせなんぞ反吐が出そうだが、昨日俺とチャオズやみんなを助けて貰つたのも事実だ。武道家として手合わせ願おう」

「天さんがやるなら、ボクもやる！」

「俺は遠慮したい所だけど…、そんな空気じや無いよな。こうなつたら俺だつてまだまだやれる所を見せてやるぜ！」

その頃、北方の山奥では。

「人造人間ねえ、1～15、17～20のカプセルの中は空っぽ、16のカプセルはどこにも見当ならないか。」

「ここにあるデータが正しかつたらこのカプセルに入つていた地球人はパイパイはおろかヤコンに近い、もしくはそれを超えるキリを持つていると言う事になるのか」

「測定できない程キリの低い地球人がここまでになるなんて中々興味深い資料じやな

いか、地球にある魔人ブウが封印されたカプセルの様子を見に来たついでに軽く周りを散歩してみただけだつたけどこれはいい収穫だ。』

「界王神達に気取られないためにダークラ達を置いて弱めの部下数人で来たのは正解かな？ ゆっくりここが調べられそうだ。』

「バビディさま、地下へ続く隠し階段を発見しました！』

「でかした、今行くよ』

バタフライエフェクト、小さな行動の違いでも未来が大きく変わる現象。

この未来はどう変わつてゆくのだろうか……。

## 8・5話 暗躍

ノミ型の異星人が部下に連れられ研究所の地下へと進む。そして進んだ先には大量の資料と液体の中でぷかぷか浮かぶ緑色の虫の様な生物の入った機械を発見した。

「なになに、こいつは……、セル？。ふむふむ、どうやらこの星にいた強種族とこの星に訪れた強種族の細胞を複合させて作ったバイオタイプの人造人間か。」

「資料によると地球人、ナメック星人、サイヤ人、フロスト星人の細胞が基盤になつて構成されているようだね。完成は10年後先か？」

「にしても未完成でもなかなかいいキリをしてるねえ、持ち帰つてボクの魔術で育ててみるのもおもしろそうだねえ。」

セルを見ながら邪悪に笑うバビディ、そんなバビディに部下が声をかける。

「バビディ様、辺りにあつた資料を纏めてお持ちしました！」

「ほお、キミは確かこここの地下室を見つけたやつだね、後でご褒美をあげちやうよどれ……。」

「これは……、上にあつたカプセルに入つていたはずの人造人間とやらの設計図か、面白そただけど流石に機械はねえ、適当な星で科学に長けた悪人を洗脳して解読させてみ

ようか。』

「こつちはこの星に起こつた主な戦闘を記録しているようだね、どれも取るに足りないようなザコがくだらない争いをしてるようだね、んんん、これは！」

『エイジーー、一ノ一一ニチ

ガーリックトナノルマゾクノイチダンガ  
シユウゲキ、アクアミストヲモチイ  
チキユウジヨウノセイブツヲ、マゾクカ

サセタ。

コンゴノサクセンニリヨウデキソウナノデ  
サイシユシタガ、バイヨウハシッパイ。  
ノコルハA—D. 6ノソウコニノコルノミ。

ケンキユウハホリユウトスル』

「ふふふ、はつはつはつはつは！寄り道はするものだね、さつそくセルとやらのカプセルとこの資料、そしてアクアミストとやらの残りをアジトにしてる星に持つ帰つてみようか。』

「帰つたらすぐボクの魔術で色々ためしてみよう。きっと魔人ブウの復活が早まるしもしかしたら魔人ブウを超えるものが作れるかも知れないぞ！」

こうしてノミ型の宇宙人とその一派は地球を後にした。

### —研究記録—I—

タコ型の宇宙人科学者を洗脳、そして勧誘に成功した。早速洗脳した科学者に例の資料を見て、モルモットとして地球人、アプール星人、テイス星人を与えた。

それぞれに科学者が再現した永久エネルギー炉を移植した所、テイス星人がパイパイと同等程、アプール星人がパイパイ以上ヤコン未満、なんと一番キリの低い地球人がヤコンと同等近い戦闘力を身に着けた。

この結果は完全再現ができない事と、もともと地球人用に使われた技術のため地球人が一番親和性が高かつた事の2つが関係していると思われる。

ちなみに永久エネルギー炉で強化した人造戦士のキリを計測してみたが、数値は改造前と変わらなかつた。実際エネルギー吸収器具を使つてエネルギーを吸い出しても大したエネルギーは入手できなかつた。

魔人ブウ復活のエネルギーに使えないのは惜しいがヤコンクラスの戦闘員を量産できる。悪いのは悪くないだろう、これからメインのセルの研究とアクアミストの研究にうつ

## 9話 開始

「フツ、なかなかやるじやないか。戦闘力をお前たちに合わせたとはいえ8発もいいのを貰うとはな、特に界王拳を使われた時は驚いたぞ」

軽い試合の後に乙戦士に超えをかけるベジータ、それにヤムチャら乙戦士が軽く息を切らして答える。

「ハア、ハア、2倍にすら上げる事ができない上に反動がバカみたいに大きいけどな。正直実践じや使えたもんじやないが上手く意表を突けてよかつたよ。」

「ふん、それにしても相変わらず嫌味な奴だ、俺たちがこれだけやつても息一つ切らしてないとはな。だが良い訓練になつた。」

「ヤムチャさんや天津飯は良いよな、界王様の所で修行して界王拳まで貰えてさ。かーっ！俺も行つて見たかつたなあ、界王星。」

「まあそう言うなよ、クリリンの太陽拳で隙を作つてくれなかつたら俺も天津飯も界王拳で突つ込め無かつたんだぜ。クリリンは界王拳とかが無くとも今ある技を上手く使いこせて十分凄いと思うけどな。」

「ああ、でも太陽拳が上手く決まつたのはチャオズが超能力でベジータの顔をオレの方へ向けてくれたおかげさ。オレ1人の実力じゃないさ。」

(こ)いつら、と言うより地球の戦士は今思うと連携やアシストに関しては一級品の物が多いな。それ故に戦闘力の伸び悩みが惜しいな、それとも鍛え方さえ工夫すればもつと戦闘力を伸ばせるか?」

ベジータがそんな事を考えていたら神殿の方からガチャリ、という音が聞こえた。ついにピッコロと悟飯が精神と時の部屋から出てきた様だ。

「…、待たせたな。」

そこには以前とは比べ物にならない程に強くなつた二人がいた、ピッコロはもう17号と互角に戦えるだろう、悟飯は背も伸び、一段と逞しくなつたがまだピッコロやベジータよりは劣るだろう。：通常の状態であれば。

「上出来だ、悟飯もお前もな。後は俺がサイヤ人としての悟飯を伸ばす、それが終わつたらいいよいよ人造人間を片付ける。」

「お前に言われるまでもない。」

「それじゃあ行くぞ、悟飯!」

「はい、ベジータさん!」

そしてベジータと悟飯は精神と時の部屋へと入つて行つた。

「さて、早速手合せと行きたいが。先にピッコロとの修行の成果から聞いておこうか。」

「解りました、じゃあ：、はああーつ!!」

一気に気を開放し戦闘力を上げる悟飯、髪は金色に染まり目はエメラルドグリーンに輝いている。

「ほう、半年でスーパー saiyan人にまで仕上げたか。流石と言った所か?」

「ありがとうございます、でもこの状態で戦つていられるのは十数分だけです、スーパー saiyan人を維持するだけなら一時間は何とか。」

「なるほどな、なら一度スーパー saiyan人を解け。スーパー saiyan人抜きの戦闘力の限界とお前の動きを見たい。」

「解りました、ふうーーっ。」

少し力を抜き、スーパー saiyan人を解き黒髪での限界戦闘力に合わせる悟飯、それを見てベジータが構える。

「よし、それじゃあ早速行くぞ！来い!!」

「はいッ!!」

# 10話 次のステージ

「はああーーーっ!!」

悟飯がベジータに突つ込み、突きや蹴りを高速で打ち込み、怒涛のラッシュを仕掛け。所々に的確なフェイントが混ぜられておりなかなかカウンターを決められないベジータ、完全に悟飯のペースである。

(くつ、一旦距離を!) 「!!」

ベジータが距離を取ろうと後ろに跳ぶと悟飯も小さく後ろに飛びながら高速なエヌルギー弾を放つ。

(速度は速いが威力はそこまで…こいつは、)

気弾を左手で上空にはじくと目の前にも悟飯が迫っていた、そのまま悟飯はベジータの腹めがけて正拳突きを放つ。

「ー!!」

しかし悟飯の正拳突きはベジータの右手でがつたりと掴まれ止まってしまう。

「くつ、」

悟飯の拳はベジータにしつかり掴まれており、押しても引いても抜け出せそうにな

く、その握力で拳はミシミシと音を鳴らす。

「気弾の影に隠れ距離を詰めるアイデイアは悪くは無かつたが、自分の方向へ弾き返された時を考慮して威力を落としたのは間違いだつたな。陽動なのがバレバレだ」

「はあッ！」

「わっツ！」

上空へ投げ飛ばされる悟飯、そしてベジータは雨の様な大量の気弾を悟飯に浴びせた後、エネルギーを溜める。

一方悟飯は空中で弾幕に囮まれ逃げ場が無い、仕方なくダメージ覚悟でガードしたが大量の気弾を被弾してしまった。

「さあて、まだまだ終わらんぞ！ギヤリック砲!!!」

悟飯が怯んでいる隙に溜めた氣でギヤリック砲を放つ

これを貰うと確実にやられる、そう判断した悟飯は急いで降下し地上に着地したが「でりやああ!!」

「なあつ、」

悟飯が地上に逃げる事を読んでいたベジータがギヤリック砲を途中で撃つの中斷し、先回りして待ち構え悟飯の背中に膝蹴りを喰らわせる。

ベジータに蹴られ吹っ飛び転がる悟飯、意識はあるがどうやら立てそうにはない。倒

れている悟飯にベジータが近づく

「…勝負ありだな、一度の隙を見つけ何とか勝てたがこちらもだいぶ危なかつたぞ。」

「ありがとうございます。」

ふらふらと立ち上がる悟飯、それを見てベジータが悟飯に肩を貸す。

「一旦神殿に戻つて一時間程休息をとる、休息の後はスーパーサイヤ人になつてもらうからしつかり休めよ」

「解りました」

神殿に戻りお互い休息をとる二人、そしていつの間にやら一時間がたつた

「さて、じやあ早速スーパーサイヤ人になつてもらおう」

「解りました、はあつーー!!」

「よし、スーパーサイヤ人になつたな。俺もスーパーサイヤ人になるとしよう、ハツ

!!

悟飯とベジータシユンシユンと独特な音を鳴らし金色のオーラが溢れ出す超サイヤ

人へと返信する。

「それじゃあ早速……。」

「チチから出された宿題をするぞ、さつさと勉強道具を取つて来い」

「なつ!?

「語学や歴史は教えられんが数学科学なら俺も英才教育で学んでいるから教えられるだろう、科学もフリーザ軍のものを学んでいるからお前よりは知識が

「ふざけないで下さい!」

怒りでベジータの言葉を遮る悟飯、そして悟飯が話し出す

「僕はあんまり長くスーパーサイヤ人を維持できません、だから1秒も無駄にしたくなぃんです!」

「勉強も確かに大事ですけど今はそれどころじゃないのはベジータさんが一番よく解つてるはずです!だから今は勉強何かより修行の方を!!」

感情にまかせ自分の言葉をぶつける悟飯、それに対し冷静にベジータは返す  
「まあ頭に来るのは解る、スーパーサイヤ人の状態だから尚の事か、なら3つ質問をしよう。スーパーサイヤ人になる条件、カカロットから聞いているか?」

「え、えっと…穏やかな心を持ち、激しい怒りで目覚め……る?」

自信なさげに答える悟飯、それに対しにベジータが二つの質問をする

「その通りだ、ならスーパーサイヤ人の状態だと普段の状態と比べどうなる?」

「ええ…普段より気性が荒くなります」

「その通りだ、じゃあ最後の質問だ。スーパーサイヤ人の状態でも穏やかな心を保ち、

そんな中急激な怒りが加わるとどうなると思う？」

「穏やかな心…激しい怒り……！」

ハツとした顔でベジータを見る悟飯、それに対しにベジータが返す  
 「気づいた様だな、その通りだ。スーパーサイヤ人の次のステージに行くにはスーパーサイヤ人の状態でも平常心を保てる様になり、尚かつ激しい怒りが加わる必要がある。」

「だからこれはスーパーサイヤ人になつても平常心を保つための訓練だ。今の状態なら戦闘訓練はわざわざスーパーサイヤ人になつてやる必要はない。」

「言つておくがスーパー・サイヤ人で無い状態の時は絶対に勉強せんからな、となるとこのままでは不味いんじやないか？チチに押し付けられた冊子は相当な量だつた気がするが？」

「わっわっわっわっわーーー!!い、急ぎましようベジータさん！と、とりあえず数学から…」

こうして悟飯とベジータのおかしな修行が始まった、果たしてこの先どうなるのやら…。

## 11話

ベジータと悟飯の訓練が開始し一ヶ月が過ぎた。

ベジータも悟飯も最初の数日はスーパー Saiyan の興奮故になかなか勉強を教えるのも学ぶのも上手くは行かなかつたが、既に自分の時間軸でスーパー Saiyan 2 になっていたベジータは一週間程でスーパー Saiyan の状態でも平常心を維持できるようになった。

悟飯の方も十数日でスーパー Saiyan の状態でも平常心を保てるようになり、その事によりスーパー Saiyan を維持できる時間もかなり伸びる。

そして3週間目になるとベジータは1日中スーパー Saiyan を保てるようになり、悟飯も半日近くスーパー Saiyan を維持できるようになる。

その事により勉強時間がやたらと伸びてベジータのストレスがマツハに、この事から勉強は最長でも1日3時間までとなつた。しかし可能な限りなれるのであればスーパー Saiyan の状態を続けるようにした。

そして今では二人とも寝る時でさえスーパー Saiyan を維持できるようになつた。  
(まさか一ヶ月でここまで来れるようになるとはな、セルゲーム前に俺が精神と時の

部屋に二年分程籠もつた時とは比べ物ならんスピードだ。)

(それにこちらの時代のカカラットと悟飯もこの形態になるまで1年程かかってい  
た、しかしあの時はお互いスーパーイヤ人との先のステージを手探りで探つていた感じ  
だつた。進むべき道があらかじめ解つているというのがここまで大きいとはな。)

「おい、悟飯！」

「はい！ベジータさん。」

「今まで戦闘訓練の時はスーパーイヤ人を解いて行つていたが今回からはいよい  
よスーパーイヤ人を解かずに戦闘訓練を行う。」

「わかりました！」

「それじゃあ行くぞ！」

「はいっ！」

お互いに構え、睨み合う二人。少しの間膠着状態が続いたがベジータから攻撃を開始  
した事により膠着が解ける。

「りやありやりやりやりやりやあーツ!!」

「なつ、はつ！わッ、はつ、ん!!」

ベジータは突きや蹴りを絶妙にフェイントを混ぜつつ嵐の様に悟飯に浴びせる。一  
方悟飯はなかなか攻めに転じる事ができず回避やガードを重点に置いて動く。

悟飯はなかなか攻めに転じる事ができず回避やガードを重点に置いて動く。

戦闘は完全にベジータのペースで悟飯はベジータの攻撃を避けたり防ぐので精一杯のようだ。

(目や気では俺の動きを追えている様だが身体の動きがまだスーパーサイヤ人に馴れていないか、悟飯は自分の戦闘スタイルに持ち込めていないな。)

(今回がスーパーサイヤ人での初戦闘だから当然と言えば当然か。だが気の大きさは申し分ない、ある程度戦闘に馴れてきたら悟飯を怒らせるキッカケを与えてみるか。)(しかし魔人ブウが復活するのはだいぶ先、無理にスーパーサイヤ人2にするよりスーパーサイヤ人の練度を上げるのに集中するのもいいかもしねんな。)

(こちらの時代の悟飯はあえてスーパーサイヤ人にならない道を選び一時は俺の遙かに上の戦闘力を身に着けている。ここは焦らず様子を見てみるか。)

(悟飯を怒らせるいい方法も今ひとつ思い浮かばんしな)

戦闘はそのままベジータの勝ちに終わつた、がお互い久々の完全な全力を出せて晴れ晴れした顔をしている。

「どうだ? スーパーサイヤ人で戦つた感想は?」

「はい、最初は想像以上に力が出て上手く身体を動かせられませんでしたが。僕こんなに強くなつていたなんて。」

「それにスーパーサイヤ人で戦つていたのに全然疲れなかつたのにも驚きました。」

「それはお前がスーパー saiya 人の次の段階、スーパー saiya 人 2 の一歩手前まで来ている、つまり順調に成長している証拠だ。」

「え！ それじゃあもうすぐスーパー saiya 人の次の段階に!?」

悟飯は目を輝かせ、わくわくしながらベジータに聞くが、「スーパー saiya 人 2 になるには生半可な怒りでは無理だ、一度スーパー saiya 人 2 になつてもいなければな。」

「つまりここでお前がスーパー saiya 人 2 になるのは厳しいだろう、だから残りは今 のスーパー saiya 人としての練度と戦闘力の基礎を上げるのに重点を置くぞ。」

「わ、解りました……。」

「……、まあ。」

先に進むのは難しい、それを知り寂しそうな顔をする悟飯にベジータが声をかけた。

「一応例外として何かキツカケがあれば怒りを無にしてスーパー saiya 人 2 に目覚める可能もあるし、一応その手段も考えてある。だからしばらくはスーパー saiya 人の練度を上げるのに集中するぞ。」

「は、はいっ!!」

僅か 1 ヶ月で目覚ましい成長を遂げた二人、これから先どのように成長をするのか。

精神と時の部屋、今回の使用時間終了まであと5ヶ月

## 12話 進化の方向性

初めて超サイヤ人の全力で闘つた日の夜、悟飯は後からどつと来た疲れにより早い時間から既に眠りについていた。ベジータの方はと言うと、

「はあああつーー!!」

ベジータから金色の気が溢れ出し、放つ気はバチバチと稻妻の様なオーラを纏つている。

宮殿から遠く離れた所で自分の実力の確認を行つていた。

「……よし、超サイヤ人2になれたか。さて次はと」

自分が超サイヤ人2になれる事を確認したベジータは上空に氣弾を放つたり、自分がバビディに魂を売つて闘つた時の悟空を想定しながらイメージ組み手を行つたりしどれほど動けるかを確認した。

(……、今の自分の戦闘力はおおよそセルグームの時の全力の悟飯と同じ位でバビディに力を開放させた時のオレよりは劣るといった所か?)

(燃費の方も普通に戦う分には問題無さそうだ、一通り身体を動かしてみてもまだだスタミナに余裕はある。)

(さて、次は超サイヤ人3を目指す。と言いたい所だが。あれは本当に超サイヤ人2を正当に進化した姿なのか?)

(カカロツトの言つていた超サイヤ人3の特徴は燃費は悪いが圧倒的なパワーを得られスピードももちろん超サイヤ人2よりも早い、パワー型の形態であり筋肉量もかなり増加していたが身体を動かす時に邪魔にならないキレイな增量のしかただつた。)

(燃費以外では超サイヤ人2よりレベルが格段に上がつてゐる事から超サイヤ人3は超サイヤ人2から燃費を犠牲にして成長した形態と考えられる。)

(しかしそれと同時にトランクスが行つた超サイヤ人のパワーのみの形態を実戦で使えるように完成させた形態のようにも思える。)

(カカロツトの超サイヤ人3を正当な進化では無いと考えたキッカケの形態、俺が初めてビルスと闘つた時になつたあの謎の超サイヤ人の形態だ。)

(戦闘力は超サイヤ人3カカロツトより高かつたらしいが見た目は普通の超サイヤ人であつた、そして超サイヤ人1と超サイヤ人2は見た目だけ見ればどちらも同じように見える)

(そしてオレは意地になりカカロツトの超サイヤ人3になるキッカケを聞かなかつた、そのせいで超サイヤ人3のなり方はわからん。がビルスの戦いでなつたあの超サイヤ人になるキッカケ、)

(それは間違いなくブルマがビルスに叩かれ倒れたことによる”怒り”がキツカケとなつてゐる。)

(正直どちらが正しい超サイヤ人3かはどうでもいいがオレがどちらの進化を選ぶべきかは慎重にせねばならん。)

(カカロットの超サイヤ人3はなり方そのものは解らないものの超サイヤ人3が戦つてる姿はこの目に焼き付いているし、そしてその驚異的な強さも自分でハッキリわかっている。)

(それに対しオレがビルスの戦いでなつた超サイヤ人、戦闘力に関しては周りの話によると相当なものだがオレは怒りに任せてビルスを攻撃していたからあまり印象はない。それにあの時に相当するほど怒るという事は……、いやそんな事はこの時代では絶対にさせん!!)

(しかし自分で一度その形態になつているのが大きなアドバンテージなるだろう。超サイヤ人2にこうも簡単になれたんだ、もしかしたら基礎戦闘力を上げていけばあの超サイヤ人にあつさりなれる可能性もある。)

「……、とにかく今は基礎戦闘力を上げつつ悟飯達を育成するのを優先すべきか。」

そしてベジータは最後にもう一通り超サイヤ人2で身体を動かして宮殿に帰り眠りについた。

# 13話

あの日からあつという間に月日は流れついに今回の精神と時の部屋使用時間が残り2日となつた。

あれから二人は一度も超サイヤ人を解かずに生活し続け、悟飯は超サイヤ人を完璧に使いこなす様にまで成長する。

ベジータは悟飯が起きている間は超サイヤ人で過ごし、悟飯が寝た後は超サイヤ人2になり超サイヤ人2の練度を上げていた。

そして今悟飯とベジータはいつもの通り宮殿からそう遠く離れてない所で最後の訓練を開始しようとしていた。

「よし、悟飯。明日は休憩にのみに時間を割くから今日が実質的な最終訓練日とな

る。  
」

ベジータの気が一気に膨れ上がり気がスパークの様にバチバチと鳴り響く、超サイヤ人2である。

「ベジータさん！これが。」

「ああ、超サイヤ人2だ。今回は少々危険ではあるがこの状態の俺と戦つてもらう、超サイヤ人2を相手にする事によつてお前にもキツカケを掴んでもらうという訳だ。」

「悟飯も超サイヤ人2に限りなく近づいているのは確かだがやはり1と2の差は大きい、気を抜くと最悪命の危険もあるだろう。気を引き締めて来い！」

「わかりました！ はああーっ！」 シュイイイン!!

自分の出せる限界まで気を上昇させる悟飯、それを確認したベジータは一気に悟飯に突っ込む。

「てやああああ！」

ドツ ガツ パス サツ ドゴツ

「りやあああ！」

ベジータの猛攻に必死に食らいつく悟飯だが自分の攻撃は避けられるか防がれ、ベジータの攻撃はガードするので精一杯な上ガードした所が威力を抑えきれず悲鳴をあげている。

(やはりこの方法はまずかつたか？この調子だと悟飯はそう長くは保たんだろう。こちらもある程度手は抜いているが手を抜きすぎるとこの訓練の意味が無くなるからな。)

(今思えば悟飯はセルとの戦いでどれほど痛めつけられてもSS2には覚醒しなかつ

た、となると生命の危機とスーパーサイヤ人のスイッチが入るのはあまり関係は無いのかもしれんな。とりあえず今回は格上に対する立ち回りを——

「スキあります！」

「なつ!?」バギツ!!

ベジータが思考に気をやり動きが甘くなつた所を悟飯は見逃さず渾身の蹴りがベジータに決まり、ベジータは遠くへ吹っ飛ぶ。

「まだまだあーッ!!」バシユバシユバシユバシユバシユ

「クソツ！」

(…ふつ、オレとしたことが。目の前の相手はカカロツトの子供だというのにいらん考え方。マジメにやらなければこうなるのは当然だな。)

想定外のクリーンヒットに驚きつつ反省し同時に流石は力カロットの子だと喜ぶベジータ、急いで体勢を整えようとするが目前には大量の悟飯の気弾が向かって来ている。

(避けるのは無理だな、そして食らつたら痛そうだ。ならば!)

「はあああああーーーーッ!!!」 ボボボボボボン!!!

ベジータが大きく叫ぶとベジータの気が周囲に発散され、悟飯の気弾がベジータに届く事なく破裂し爆煙を上げる。

爆煙に包まれたベジータはどこから悟飯が攻めて来てもいいように神経を周囲に研ぎ澄ませる。が

(……。周囲にいない、後ろにも上にも下にも正面にも。どこへ行つた? )

ベジータは悟飯を探すべく精神と時の部屋全体の気を探る、するとここからかなり遠

く離れた所に高速で動く悟飯の気を感じる。どうやらこちらから距離を離している様だ。

(逃走か、罠か?どちらにせよあいつは頭のが切れる。あいつに猶予を長く与えるのはまずいな)

そしてすぐベジータは悟飯を追つた。

「気づかれた、あのスピードだとすぐに追いつかれる。それならそろそろ……。」

(移動速度が落ちたが悟飯の気が上がっていく、どうやら大技を決めるためのエネルギーを溜めるため距離を取つた様だな。だったら気が溜まりきる前にたたく!)

ベジータの追跡に気づく悟飯、するどつかさず技の用意をはじめる。それに気づいたベジータはさらにスピードを上げる。

(もうすぐ追いつかれる、なら今撃つしかない!)

ベジータが追つて来ている方向を向き、額に人差し指と中指を当てる悟飯。悟飯の溜めた気がその指へと集中する。

(凄まじい気の膨張、そしてその気が一点に集中している。この技は!!)

悟飯の姿が豆粒位に見える距離まで近づいたベジータ、それと同時に悟飯の準備が整うところを目撃する。

「当たれええーー魔貫光殺砲ーーーー!!」ズビーーーツツツツ!!

(SS2でもこれをもらうのは不味い!!)

急いで回避をするベジータ。そして

「があつ!!」B o o M!!!

魔貫光殺法を躲したベジータに巨大なエネルギー波が直撃する。現状を理解できないベジータは悟飯の方を向くと悟飯が魔貫光殺砲放つたのとは別の手で魔閃光を放つていたのが確認できた。

（魔貫光殺砲も魔閃光も、どちらとも全力の気を込めて放たれていた。ふつ、無茶しやがつて。だがオレがSS2でなかつたらお前の勝ちだつたかもしけんな。）

「はは、今まで決めれなかつた。やつぱりベジータさんは…すゞいや……」

そう言い残し落下していく悟飯それをベジータが受け止めた所で試合は終了となつた。

# 14話 次の一歩

「——来たな。」

聴覚の優れたピッコロが精神と時の部屋が開くのを察知した。そして皆が精神と時の部屋の前へと集まる。

「待たせたな、ピッコロ。」

「：嫌味な奴だ、俺が精神と時の部屋に入る必要が無かつたみたいじゃないか。」

精神と時の部屋から出てきたベジータは自分とは次元が違うと思う位の成長を遂げており、これから戦闘に安心感を持つと同時にそれ以上の悔しさを感じた。

「だが人造人間討伐には連れて行つて貰うぞ、一応何が起ころか分からんからな。」

「それで頼む、それじゃあ早速人造人間を倒しに行くぞ。」

ブルマの持っていたラジオで人造人間の居場所を確認したベジータとピッコロは早

速その場所へと飛び立つた、場所は東エリアのオレンジシティの様だ。  
あつという間に遠ざかる二人を悟飯はただじつと見守った。

「ひいいいっつ。し、死ぬう…」

「はあーっはっはっは！ そうだよ、その顔だ。そんな感じの絶望に染まる顔が見えた  
かつたんだよ。これっぽつちも強く無かつたがその顔だけで十分楽しめたぞ。」

某刻、オレンジシティではそれなりに我体が良く、アフロの男が1人で人造人間達に  
弄ばれていた。

(ううう、住人を逃がすために囮になるなんて馬鹿な事するんじやなかつた…。しか  
しふーデルの前で情けない姿を見せる訳にはいかんかつたからな。)

(でも今の状況つてすごくかつこいいんじやないか、娘のために住人を逃し独り勇猛  
に散つていく…。これならお前の母さんに胸をはつて会いに行けるかな？ 天国に行け  
るか分からんがな。ああ、ビーデルよ…。)

(ううううう、でも嫌だ、まだわしは死にたくない！ 死ぬのは怖いい…。)  
「だつ、誰かあー、助けてくれーーッ！」

男の叫びは虚しく廃墟と化した街に鳴り響くだけであつた。

「はあーっはっはっは！ 残念だつたな、誰もお前なんか助けに来ないし来たところて  
結局誰も助からない。なぜなら俺達は最強の人造人間だからな。」

「十分楽しめたお礼だ、辛かつただろう？ そろそろ楽にしてやるよ。はあつ！」  
ドーン!!!!

17号のエネルギー弾で凄まじい爆発が起る、普通の人間がこんなものを喰らえばひとたまりもないだろう、しかしその爆煙の中から3つの人影が見えた。

「た、耐えた？なつ、誰だ！」

自分では信じられない出来事が起こり戸惑う17号、焦るままに誰か問うと爆煙が晴れ、その姿が現れた。

「ひいいいい、ごめんよビーデルううう……あれ？」

自分がまだ生きている事と目の前に人がいる事を知った男は急いで虚勢をはる。

「お、おい！お前たち何をしているんだ。オレが命を張つて時間稼ぎをしたというのに！」

「あ、あんな奴らオレの奥義でちよちよいのちよーいと倒せるわい！だからお前たちはワシの邪魔にならんよう……」

「サタン、よく持ちこたえた。タフさだけは流石だな後は俺たちがやる、だからさつさとこの場を離れるんだな。」

「ん、なぜオレの名前を知つとるんだ？もしかしてオレファンか？」

「ま、まあオレもちよーつとばかしお腹が痛くてなす、少しだけ席を外すぞ。こ、これ

は逃げるんじや無いからな！」

そう言つてアフロの男はこの場を離れた。

「誰だつたんだあいつは？」

「……さあな、ただ凄いやつだよ。あいつは「言いたく無いならいい、俺もそれほど興味は無いからな。ただ……確かに凄い奴なのかも知れんな。」

軽く呟いた二人に人造人間が声をかける。

「ほお、お前はこの前逃げたサイヤ人、ベジータだつたか？この前は随分と恥をかかせてくれたな。横にいるのはピッコロ大魔王か？面白い友達がいたんだな。」

「でも誰を連れて来ようが同じだ。」

「今回は逃しはしないよこちらも最初からフルパワーで、二人がかりで……殺す！」

殺氣ビンビンの17号と18号、今にも飛びかかってきそうな感じで構える。

「俺が17号をやるから少しの間だけ18号の相手を頼む。」

「フン、いいだろう。時間かけても構わんぞ俺も精神と時の部屋での成果を見たいんでな。」

「ふつ、そんな事言つて死んでも知らんぞ。まあそんな時間はないと思うがな。」

「あーーッ!!!!」

サイヤ人とナメツク星人は気を開放した。

# 15話

「はあーツ！」ドゴオーラ。ビーツ・ビーツ!!!

「——ツ!?」B〇〇〇〇〇〇m

一瞬の出来事であつた、超サイヤ人2となつたベジータが17号に蹴りを入れふつと  
ばし気弾をあてて跡形も無く消し飛ばした。

まだ神経の反射が追いついていない18号、消し飛んだ17号を目で追う前にベジー  
タにエネルギー弾でこちらも跡形もなく吹き飛んだのであつた。

「——!?!……まさかここまで一瞬で終わらせるとはな、本当に俺がついてくる必要  
はあつたのか？」

状況を把握すると同時に改めて自分とベジータの差を見せつけられ複雑な心境を抱  
くピッコロ。

「ああ、万が一があつたら色々と面倒だつたんでな。それが無くて良かつたという所  
だ。さあ、神殿に戻るぞ。」

(ふう、やはり一瞬で決めて正解だつた。今の実力を持つても精神と時の部屋に

入つて長い時間を費やしていなかつたら人造人間を殺すのを躊躇していただろうな。)

(力の大会ではかなり助けて貰つたが……。運命は本当に解らんものだな。)

そして2人はオレンジシティを後にしたのであつた。

「えーっと、何が起こつたんだ?」

近くに身を潜めていた男がひよつこりと顔を出した、辺りに人造人間はおらずあるのはボロボロになつた街だけであつた。そんな中男に誰かが声をかけた。

「パパ? だいじょう、ぶ?」

「び、ビーデルか?」

男が声のする方向を見ると自分の娘と何人かの人影が見えた。

「助けを呼んできたわよ、パパ!! ……あれ? 人造人間は?」

「じ…じんぞうにんげん? ……は。は一つはつはつはつは! ビーデル、人造人間ならこのわしがガツーンとやつつけてやつたわい!!」

ビーデルという少女の連れてきた人達が驚きざわざわとさわぎ出した、その中の軍人らしき人物が何かに気づき話し出す。

「そんな、軍隊でも歯が立たなかつたのに……、もしやあなたは! 世界格闘技大会のチャンピオン、ミスター・サタンでは?」

「…ふふふ、そのとおり! 人造人間はこのミスター・サタンが征伐してやつたぞ!」

「おお！流石世界チャンピオンだ！」

「サーファー！サーファー！」

こうしてオレンジシティは、南の都から東のエリアのオレンジシティを破壊して回つた人造人間を倒した英雄の名を取り、サタンシティと命名された。

一方神殿では：

「おかえりなさい！ベジータさん、ピッコロさん。」

「おいおいえらく早いじゃないか、でもお前たちの気はしつかりここまで届いていたぜ！ハンパない気だつたな」

帰還した2人に悟飯やZ戦士達が次々と声をかけていった。そして。

「さて、それじゃあ早速。」

「任せろ、今ちょうど界王様に通信を送つている所だ。」

そしてピッコロが送つたテレビシーに界王が応えた。

「おー、待ちくたびれておつたぞ。もう場所は調べておるぞ、それじゃあ早速教えよう。」

「新たなナメック星の場所を。」

# 乱戦！新ナメック星編

## 2章 1話出発

「よーし、早速言うからしつかりメモをとるんじやぞ？新たなナメック星の場所はS V10地方の7563XYじゃな。」

「前のナメック星の場所よりも地球から見て少し奥の方の所じや、前に悟空が使つておつた宇宙船で2週間と言つたところかのう？」

「解りました、ありがとうございました界王様。」

「この位ならお安い御用じや、お主らにはフリーザを退治してもらつたからな。その時の軽い礼だと思つてくれ。」

そう言うと界王はピッコロ達との通信を切つた。

「さて、ナメック星に行くメンバーだがオレとピッコロ、それと悟飯クリリンの4人で

いいか?」

ナメツク星の場所が解り早速ベジータが行くメンバーの確認をする。

「まあ、ナメツク星人達と話すなら顔見知りの俺達とナメツク星人のピツコロが行くのは解るけどベジータも来るのか?」

「おれ達はベジータがまともになつたのはナメツク星人の方はまだお前の事許して無いと思うから事態が拗れそうで心配なんだよなあ。」

「その事なら心配するな、ナメツク星に着いてもオレは外に出ないつもりだ。ただせつかく片道2週間、往復で4週間もあるんだ、お前たちをある程度鍛えれると思つてな。」

「ふん、余計なお世話だが確かに俺もお前とここまで戦闘力の差があるのはあまり良く無いだろう。ベジータの話が正しければ数年後魔人ブウとやらとの戦いが控えてい、その時足手まといになるのはごめんだ。ここは悪いがその言葉に甘えるとしよう。」  
ベジータの意図が解り同意するピツコロ、そしてそれなら仕方ないとクリリンも同意した。

「それなら俺達も連れて行つてくれないか?」

ベジータ、ピツコロの話を聞きなんと天津飯も同行を申し出た。

「地球人の伸びしろなんてたかが知れるかも知れん。が、この先に大きな敵が待ち

受けていいるなら俺だつてできる事はしておきたい。良かつた俺達も連れて行つてくれないか?』

『いいだろう、精々他の奴らに置いていかれないようにするんだな。』  
「すまない、助かる。』

こうして天津飯がナメツク星に同行する事が決定し、天さんが行くならとチャオズも同行を決める。そして周りが行くならと乗り気でないもののヤムチャも同行する事になつた。

「それじゃあ、行くか。』

『いざ!ナメツク星へ!』

『ー、ーー、ー。多数の高工エネルギーを持つ生命体のいる惑星を発見。これよりビッグゲテスターを着陸させる。』

『繰り返す、多数の高工エネルギーを持つ生命体をーーー。』

## 2章 2話

Z戦士達はブルマの用意した宇宙船で新ナメックへと向けて飛び立つた。ちなみに宇宙船はもともとフリーザ軍で運用されていたアタックボールを元にして作った物なのでベジータが操縦する事になりブルマはお留守番となつた。

「さて、ナメック星につくまで2週間あるわけだが、最初は重力になれて貰うため50倍にしておく。それと悟飯、ピッコロ、お前たちは気弾を使うな。宇宙船が壊れかねんからな。」

「それじやあ重力をかけるぞ。」カタ、ポチポチポチ

ズウーン

ベジータが機械を操作すると部屋全体に圧力がかかり出す。

「おおっ！きたきた。へえーこれが50倍の重力ねえ、確かにちょっと体が動かしにくいかな？」

「身構えちやつたけどこの位ならわりと平氣だな。重力数はこっちの方が上だが、初めて界王様の星に行つた時の方がキツく感じたな。300倍は死ぬかと思つたけどな。」

少し身構えていたが思つたより圧が少く、すぐに緊張がとけるクリリン。ヤムチャも似たような感じだが、かかる重力にトラウマを連想する。

「これならすぐに次の倍率に移つても大丈夫そうだな、チャオズは大丈夫か?」

「うん、ぼくも平気だよ天さん!」

地球人組の詳しい戦闘力が不明だつたため、最初は安全のため重力を低く見積もつて設定したがどうやら全員まだまだ大丈夫の様だ。

「それじやあピッコロ、相手を頼む。お前の今の実力をしつかり確認しておきたい。」「望む所だ、こちらも全力で行かせてもらおう。」

「おいおいおい、全力を出すのはいいけど宇宙船は壊さないでくれよ。」

さつそくお手並み拝見とベジータがピッコロに修業相手を申し込みそれに応じるピッコロ、そしてピッコロの全力発言に宇宙船が壊れる事を連想したヤムチャが先に釘を打つ。

「なあ悟飯、ピッコロはベジータと組んだみたいだし久々に俺と組み手してみないか。」

「正直実力ではもうお前にはかなわなくなつちやつたけど技の冴えと実践経験ならまだ負けるつもりはないぜ?」

「ぜひお願ひします!クリリンさん。」

ベジータとピツコロが組むならクリリンが悟飯に声をかける、悟飯もクリリンとの久々の修業でわくわくしているようだ。

「チヤオズ、いつも通り相手を頼む。」

「任せ天さん！」

「お、おい！ ちょっと待つてくれ。天津飯俺も混ぜてくれないか？ 流石に1人で修行つてのは……。」

「俺は別に構わんぞ、こちらこそよろしく頼む。」

いつも通りチヤオズと組み手を開始しようとする天津飯。そしてひとり仲間はずれになるものかと急いでヤムチャが修業に混ぜてもらうよう天津飯に頼んだ。

こうして戦士達の修行が開始された、希望を胸に訓練に励む彼らはこの先に大きな影が待ち受けている事を今はまだ知らない。

—惑星??—

—研究記録—I—

『この前は永久式エネルギー炉を色々試したから今度はこのカプセルに入っているバイオ系人造人間セルについて色々見てみる。』

『洗脳したタコ科学者によると細胞をあと一つ組み込む所が空いている以外はエネル

ギーが溜まり活動できるのを待つだけで完成するみたいだ。』

『さつそく最後の空きスペースにダー・ブラの細胞を組み込ませて、その後魔人ブウ復活には使えない悪の心を持つ者から採取したキリを注入してみた。』

『すると科学者によると少し成長が早まつたみたいだ、この方法が有効と確認したからこれからはボクに逆らつた奴らやダー・ブラから定期的にキリを抜き取つてこいつに注入していくのがいいかもしれないね。』

『さて、次はアクアミストを調べてみようか。』  
——Ⅱの資料に書かれているのはここまでのだ。

## 2章 3話

あれから2週間、Z戦士達はその日ごとに相手を変えつつ修業に取り組んだ。部屋の重力は150倍までは順調に馴れて行つたが200倍辺りからチャオズがついて行けなくなり、最終的に230倍の重力が限界値となつた。

そして宇宙船はナメツク星が見える位置にまで到着した、そして一同は奇妙な光景を目撃する。

「な、何だこれは!?」

最初に気づいたのはもうすぐナメツク星に着陸するのでその時に備えて操縦場所で宇宙船を操作していたベジータであつた。

ベジータの声に反応し、何だと宇宙船のモニターの所へ他Z戦士たちも集まる。するとそこに移し出されていたのはきれいな緑色した新ナメツク星と思われる惑星。

そして新ナメツクの1／3を覆いタコのように張り付く巨大な謎の物体があつた。あの謎の物体の近くに着陸するのは危険と判断したベジータは謎の物体の張り付いている反対側の地域に着陸する事にした。

♪新ナメツク星・地上♪

宇宙船は特に妨害に会うことなく地上に着陸した。するとすぐに着陸地点からそう遠くない場所で戦いの気が感じ取れた。

ただならぬ状況なため、最初は宇宙船内に待機しておくつもりだったベジータを含むZ戦士全員がその戦いの氣のある方角を目指し飛び立った。

1分もたたない内に気のあつた場所に到着するZ戦士たち。するとそこには数えきれないほどのロボットの兵隊が村にいるナメツク星人を次々気絶させ、捕獲し連れ去るという異様な光景が広がっていた。

その光景を見て何かに気づいた悟飯がいまにも連れ去られそうなナメツク星人とそのナメツク星人を連れ去ろうとする機械の元へ超サイヤ人のギアを上げ、スピードを上げてむかっていく。

「デンデくーん!!!」

「あなたはっ！まさか悟飯さん!?」

「今助けるよ、はあっ！」バシュ、ドーン!!

悟飯は謎のロボットにむかい気弾を放ち、ロボットを破壊しデンデを救出する。それに続き他のZ戦士達もロボットに戦闘を仕掛けていく。

「てやあ、りやりやりやりやりやあーッ！」ババババババ、チュドーン!!

「てりやあ、でえやああ！はつ、でやりやあ！」ズゴツ！ズバツ！カツ、ドガツ!!  
ベジータは大量の気弾で、ピッコロは突きや蹴り等で次々とロボットをなぎ倒していく。  
が。

「はあーつ、りやつ、たえあーつ！」ガンツ！ゴツ、ギイン！  
「はつ、やつ！はあーツ！」ボツ！シユウウ、ゴツ、ガツ！

「氣功砲——！」カツ!!シユウウウウ

クリリン、ヤムチャの攻撃は殆どダメージが入つておらず、天津飯の全力の気功砲で  
ようやく損傷が見られる程度である。一方。

「えいっ！んんんんんん！はあつ！」ビリリリバシユツ！プラスプラス、ポンツ！  
チャオズはお腹を痛くさせる超能力の応用で機械の配線部分等の脆そうな所を狙い  
サイコキネシスで内側から壊す様に攻撃した。

これによりチャオズはいくつかのロボットの破壊に成功する。

そして天津飯、ヤムチャ、クリリンは自分達の攻撃があまり通用しない事が解ったため、ロボットを壊すため念力を練つており近接戦闘ではすきだらけのチャオズを護衛するように陣形をとる。

避ける事に集中力を使う必要が無くなつたチャオズは自分の身を天津飯達に任せて  
サイコキネシスによる攻撃にさらに集中させる。

クリリン達の戦いが順調に行きだした事を確認したベジータとピッコロは村付近のロボットはクリリン達に任せて遠くからやつてくるロボットの援軍達の迎撃にむかつた。そして悟飯は救出したナメック星人達を戦場から離れた場所へ護衛しながら避難させていく。

## 2章 4話

「すまない、ベジータ、ピツコロ。俺たちの実力が足りなかつたせいで…。」「いや、こちらも氣を感じれない機械が相手だつたというのに戦力分担の判断を見誤つた。お前たちのせいじゃない。」

お互に自分の失態を話し合うベジータ、

ピツコロ、天津飯。なぜこんな事態になつたのか、遡る事数時間前…。

ベジータ、ピツコロと天津飯、クリリン、

チャオズ、ヤムチャの二手に別れロボットと戦闘していた。そしてベジータとピツコロは

その圧倒的数のロボットの相手をしている内に地球人組のグループとの距離が想像以上に離れていつてしまつていた。

地球人組もチャオズの超能力を主軸に戦い順調に敵のロボットの数を減らして行つていたのだが、他のロボットより一際戦闘性能の高いロボットが3機ほど岩陰に潜伏していたのに気づけず、不意を付かれクリリンとヤムチャがロボットにより連れ去られて

しまつたのだ。

天津飯とチャオズは二人を助けに行こうとしたが残つたロボットにそれを阻まれてしまふ。

結局道を阻んだロボットを倒しきつた頃にはクリリンとヤムチャの気はナメック星のいま自分達のいる場所の反対側、つまりあのナメック星に張り付いていた巨大な白い物体のある所に連れて行かれてしまつたのだ。

ナメック星人を避難させ終えた悟飯やロボットの援軍を倒しきつたベジータ達が天津飯達に合流したのがちょうどその後であつた。

「クリリン達が連れて行かれたと思われる所にナメック星人の気もたくさん感じる。そこへ向かえば何かしらあるだろうがさつきのロボットがまたこちらに来る可能性がある。」

「そうするとまたデンデやカルゴ達を危険に晒してしまう、だから救出に向かうにも何人かはここに残つておいた方がいいだろう。」

「ならまずオレは救出組だな、ナメック星人達もオレがいると落ち着いて過ごせんだけうからな。」

今の戦力を救出組と待機組の二手に分かれるようピッコロが提案する、そしてすぐにベジータが救出組に名乗り出た。

「俺は…済まないがここに残らせてもらう。俺がついていつも足手まといになりそ  
うだからな。」

「天さんが残るならぼくも残る！」

一方チャオズと天津飯は自分の力不足から待機組にする事にした。

「さて戦力的にピツコロか悟飯のどちらかには待機組になつて欲しいがー。」  
「悟飯、待機組を任せてもいいか？俺とお前だと実力はお前の方が上だ。だからこそ  
みんなを守つて欲しい。」

「解りましたーこつちは任せて下さい。」

悟飯の実力を信じ、あえて悟飯を待機組に

ピツコロが指名した。グループ分けが終わると

デンデ達ナメック星人が戦つた皆の体力を回復させていった。ベジータは過去ナ  
メック星人を大勢殺したので気まずくなり、自分はどうせ一つも怪我をしていないから  
回復の必要はないと答えたが、デンデが自ら村を助けてくれたお礼ですと一言いってベ  
ジータを回復させた。

そしてベジータとピツコロは謎の白い物体、  
ビッグゲスターへと飛び立つて行つた。

| Side ベジータ&ピツコロ。

「ツ！？危ない！」

ビッグゲテスターを目指し飛行するベジータとピッコロ、その2人に向かって正面から謎のビームが飛んでくる。

少し前に戦ったロボット達とは比べ物にならない威力とスピードのビームだつたため思わず2人は大きく避け、近くの陸地に着地しビームの発射主を見上げた。

発射主を目視で確認した2人はその見覚えのある姿に驚き、思わずこう声を漏らした。

「お前は…フリーーザ？」

「お前は、クウラー！」

……と。

## 2章 5話

「クウラだと?! フリーザじや無いのか? いや、確かに見た目がフリーザと少し違う、奴は何者なんだ。」

「何だと?! ベジータ、お前はクウラを知らないのか? 奴が言うにはフリーザの兄貴だそうだ。最もお前が宇宙をさすらつている時に地球に来て孫に倒されたはずなんだがな。」

「ちなみにトドメをさしてるのはこの目でしつかり確認した、かめはめ波で奴を太陽まで飛ばし太陽の熱とかめはめ波のエネルギーで焼ききつたのだ。孫が見逃した訳ではない、が何故か奴は生きている。しかも今は全身が機械化しているが前はそんな事は無く普通の生身の身体だった。」

(フリーザに兄貴だと?! そんな奴がいたらフリーザの野郎の下で働いていた時にオレの耳に何かしらその情報が入っていたはず。)

(もしかしたらオレが来てまた歴史が変わったのか? しかしフリーザの兄という事が事実なら奴はオレがこの世界のオレと入れ替わる前から存在しているはず、ますますわからん。)

（しかし元の世界でもオレはフリーザに父親がいる事を地球に奴らが来るまで知らなかつた、もしかしたらオレの元の世界の宇宙にもどこかで存在しているのかもしれんな。）

フリーザに兄がいたという衝撃的な事実を知ったベジータは頭の中がその事に関する考えでいっぱいになり、その場で考え込んでしまう。

混乱している2人に対しクウラがベジータに対し話しだした。

「ふん、フリーザの下で働いていたクセにこの俺を知らないとは、やはり弟は愚かだな。貴様の事は知つていてるぞ、フリーザが生かした猿共の王族の血筋の者だつたな。俺を殺したサイヤ人は病で死に残る純血のサイヤ人は残るは貴様だけだ。」

「愚かな弟の尻拭いとして俺が猿共の純血の血を絶やしにしてやろう、この俺に死刑執行人になつてもらうんだ光栄に思え。」

ベジータ達を完全に見下して話すクウラ、そんなクウラに対しベジータはニヤリと微笑み答える

「フン、フリーザの野郎も苦労したんだろうな。ここまでバカな兄貴を持つていたかと思うと同情するぜ。」

「……何が言いたい？」

「こういう事だ。」ボゴオン!!バラバラバラバラ:

ベジータが言い終わると同時にベジータのひと突きがクウラの腹に刺さりその衝撃でクウラの鋼鉄の身体がバラバラに吹き飛んだ。クウラの身体を構成していた機械の破片が地面に散乱する。

「相手にならん。これならピッコロ、お前が相手をしていた方がまだ鍛錬になつていたな。オレとした事が軽率な行動を取つた。」

「全くだ、こここの最近お前ばかり美味しい所をもつていて俺は退屈で仕方ないぞ。」

目の前に現れた気の感じ取れない敵、しかもそれがフリーザの兄という危機感を煽る存在にわくわくしていたが。その戦いがあまりにも拍子抜けで緊張がとけると同時に物足りなさを2人は感じた。

気持ちを切り替え連れ去られたクリリン達の元へ向かおうとしたその時ベジータは目の前の光景に違和感を覚えた。

「ん、なんだあれは？地平線がチカチカ光つている？」

ベジータは地平線全体が妙な光を発している事に気づいた。ピッコロも地平線に対し目を凝らし光の正体を確認しようとする。

「……ふ。どうやら今度は俺達を楽しませてくれるみたいだぞ？」

「どう言う事だ？」

ベジータはピッコロの言葉を聞き、再度目を凝らし地平線の光を確認する。そしてベ

ジータも地平線の光の正体に気づく。

地平線を覆う光の正体、それは地を埋め尽くす程の数えきれない数の鋼鉄の兵士。タルクウラの大群がこちらへ向かつて來ていている光景だという事に気づく。

メ

## 2章 6話

「はああああああ!!!」バギッドゴッズガツ

「りやあああああ!!!」ドオズパツゴキツズア

大量のメタルクウラを前に正面から挑むベジータとピッコロ、その拳でベジータは一撃でメタルクウラを次々にスクラップにしていき、辺りにメタルクウラの残骸が散らばる。ピッコロも一撃では倒せないものの難なくメタルクウラを処理していく。

1番危険な相手はサイヤ人、そう判断したメタルクウラ達はベジータに向かって自分達を突撃させ、遠巻きで包囲しているメタルクウラが一斉にベジータに向けてビームを乱射し、攻撃する。

しかしベジータはビームを避けようとせず、ビームを被弾しながらも確実に向かつて来るメタルクウラ達を淡々とスクラップしていく。またピッコロは自分へのマークが減つたため、より確実に1体づつメタルクウラを倒す事に集中する。  
 (結構な数を倒しているはずなのだが……なかなか減らんな。今は平気そうにしているが長期戦になるとピッコロがもたなくなるだろう、少しペースを上げるか。)

そうしてベジータは気を増幅させ戦闘力を上昇させる。動きはより洗礼され、攻撃力、素早さ、防御力も一気に上がるが当然燃費も悪くなる。がグズグズしているとピッコロがメタルクウラ相手についていけなくなるだろう。

(メタルクウラ共は戦いの内にどんどん俺たちの行動パターンを分析し、戦闘力は変わらないものの攻撃でできるスキや弱点を的確に狙う嫌らしい攻撃が増えてきてやがる。)

(ビッグ・バン・アタックを使つて一掃するか?しかし下手をするとナメツク星ごと吹っ飛ばしかねん、ギヤリック砲やファイナルフラッシュだとナメツク星へのダメージを避けやすいが消耗する気と倒せるクウラどもの数が割に合わん。)

(クウラ達も動きは良くなつていつているが技の速度、威力そのものが上昇している訳でもない。なら上空の敵には気弾で、地上の敵は拳でより早く撃破していくだけだ!)

「はあああああッ!!」ババババズゴズゴグシャバゴッ!!

ベジータの気弾、打撃でチリヂリとメタルクウラの破片が降り落ち、辺り一面に残骸が降り積もっていく…。

「かれこれ1時間位、戦いの気を感じるな。」

「ベジータ、ピッコロ。大丈夫かな。」

「……。」

ベジータ、ピッコロの激しい戦いの気は悟飯達が待機しているデンデ達の村にまで届いていた。

「これ程までの戦闘の気を放ち続けるとは……、相当の強敵と戦つておるのだろう。体力の方は大丈夫じやろうか……。」

「ムーリ最長老様！私はこの村唯一の戦闘タイプの戦士です。どうかあの者達の加勢に向かわせて下さい！ナメツク星の危機を他の星の者だけに背負わせる訳には……！」

「ならボクも行きます、最長老様！ボクの回復能力ならきっとピッコロさん達の助けになるはずです！」

ピッコロ、ベジータの様子が気になり加勢に志願するナメツク星人の若者にデンデ、それに対しムーリは悔しそうに答える。

「悔しいがワシらの誰が行つてもあの者達の邪魔になるだけじゃ。ナメツク星の強者の戦士達はあの口ボットになすすべなく捕まつていつてしまつた、彼らが戦つておる相手はその口ボットたちより遥かに強い存在であろう。」

「ワシらにできるのは残念じやが彼らの無事を祈るだけじや……。」

「クソつ！もつと力があれば…。」

ナメック星人達は自分達の無力さにただただ嘆いていた。そんな中、悟飯が声を上げる。

「なら、僕にピッコロさん達の所へむかわせて下さい！村がピンチになつたらすぐに戻ってきます！」

「…わが村の事は気にしなくてよい、彼らのために力をふるつてやつてはくれんか。」

「悟飯、力及ばずながらこの村には俺とチャオズがいる。仮に誰が来ようと命を削つてでもこの村を守り抜く、だからピッコロ達を頼んだぞ！」

「ありがとうございます、それでは天津飯さん、チャオズさん、この村をたのみます！」

バジュー

「悟飯さん…どうかお気をつけて…!!」

こうして悟飯はベジータ達の元へ飛び立つていった。

## 2章 7話

悟飯がナメック星の村を出る数分前

l s i d e ベジータ&ピツコロー

「ふうーッ…。」

「ぜえ…ぜえ…かあツ、はツ！」

「…。」

ベジータとピツコロは背中合わせになり構え陣形をとる。その2人を少し遠巻きに地上、上空全方角を大量のメタルクウラ達が包囲し様子を伺つており、辺りにはベジータ達が倒したであろうメタルクウラの残骸が地を埋め尽くしている。

(まさかここまで戦いが長引ぐとはな、オレはまだまだ余裕があるがピツコロはそろそろ限界が近いだろう。しかしかなりの数を倒したはずだがまだあんなに残っているとは…まずいかもしれんな。)

『…おい、ベジータ。聞こえるか?』

『!!。気での会話か?ああ聞こえている、どうしたピツコロ。』

ベジータが状況を考察中、突然頭にツンとする刺激が走りピッコロの声が聞こえた。

急の出来事に少し驚くがすぐに冷静になりピッコロに要件を聞く。

『…。86と4927、これが俺とお前が倒したメタルクウラの数だ。』

『2人でおおよそ5000体程倒したと言う事がそんなに倒してたとはな、それがどうした?』

『…俺達の足元に散らばっている残骸がおよそ2000体分位だ。』

『なんだと!? ジやは残り3000体の分はどこへ行つたんだ。』

『途中からヤツの残骸の数に違和感を覚えてな、周囲の残骸の様子を探りながら戦つていたんだ。』

『見た所不定期的に残骸の一部が少し揺れしばらくしたあと俺達のすきをついて地中からヤツが這い出て来て何食わぬ顔で集団の中に混ざつていった。』

『恐らく残骸が一定の量地面に降り積もつたら残骸達が地中に潜り、そのまま地中で身体を復元させ俺達にバレないように集団の中に戻り戦闘に復帰していたのだろう。』

『なる程、道理でなかなか数が減らん訳だ。』

『…そして解つているだろうが俺はここまでの一連の事を伝えられただけよしとするか。後は残るエネルギーを使い切つて一体でも再生できんように跡形もなく消し飛ばして…。』

『その必要は無い。』

メタルクウラの戦法を解析しベジータに伝えた後、最期の猛攻をクウラ達に仕掛けようとするピツコロ。それベジータが止め今度はベジータが氣で話し出す。

『オレ達が来た村の方角の上空に向け全力のエネルギー波を撃ち込む。それほど奴らの総数はそれほど減らせんだろうが攻撃を撃ち込んだ所の陣形が崩れて一瞬だが道ができるはずだ。』

『そこを通つてナメック星人達の村へ戻つてデンデに回復してもらつて悟飯を連れてきてくれ、戻つて来るまでに可能な限り数を減らしておこう。』

『…すまんな。』

『その代わり仕事は果たしてもらうぞ?』

『当然だ。』

最後に2人はうなずき、合図を送り合うと同時にベジータはエネルギーを溜める。その間できたスキをメタルクウラ達は見逃さず、ピツコロには目もくれずにベジータに向けて一斉にですビームを撃ち込む。

ベジータはメタルクウラの攻撃を無視しエネルギーを溜めていく、そして

「チャンスは一度だ、行くぞ! ファイナルフラーツシユツツ!!」ズガーン!!

ベジータのファイナルフラッシュの弾道上にいたメタルクウラ達は跡形もなく消し

飛んで行く、そして弾道上にいなかつたメタルクウラ達にベジータは一斉攻撃を浴びせられる。

しかしベジータのファイナルフラッシュによりメタルクウラの包囲網に穴があく。そしてできた道を通りピッコロは戦線を離脱した。

「…さてと、ピッコロが上手くやつてくれるのなら……。試してみるか。」ベジータは再度気を溜めはじめる…。

## 2章 8話

ファイナルフラッシュで退路を作りピッコロを逃したベジータ。そんなベジータを見てベジータの正面にいたメタルクウラの1体が話しかけてくる。

「ほう、ナメック星人を一匹逃したか。だが奴が死ぬまでの時間が少し伸びただけだ、どうと言う事はあるまい。それどころか貴様は奴を逃がすために効率悪くエネルギーを消費しいらぬダメージを負った、知能の低さは流石猿野郎と言った所か？」

「ファン、その感に触る話し方はやはりフリーザの兄貴と言うのは本当らしいな。相手の力量も測れず敵の行動の意図を読み取れない浅はかさ、そんな愚かな所がまさしく兄弟と言つた感じだな。」

挑発を挑発で返すベジータ、その挑発を受けクウラは明らかに逆上した態度でベジータに返す。

「兄弟揃つて愚かだと、状況が読めていないだと？状況を読めていないのは貴様の方だ！口ぶりからして永久機関のメカニズムには気づいたようだがそれがどうした、貴様は消耗しこちらにはまだ万を超える軍勢がこの場に揃つている。」

「そして貴様が力尽きるまでじっくりと念入りに躊躇地獄以上の苦しみを与え殺してやる！泣き叫んでも許しはせんぞ！」

「...」

「何がおかしい!!」

逆上したクウラはベジータに処刑宣告を下すがベジータはそれに対し不敵に笑う、またバカにされたと感じたクウラは更に怒鳴り声を散らすが――

「いや、何も解つていらない貴様のその哀れな姿が可笑しくてついな——それ以上貴様の声を聞くのはもううんざりだ、跡形も無く纏めて消し飛ばしてやる！」

「はああああああーーーツ  
!!!

「なにつ!?」——ぐあああ——あ：

ベジータを中心にドーム状に広がる金色の光、それに飲み込まれたメタルクウラは文字通りチリ一つ残さず跡形もなく消し飛んで行く。

そして金色に輝く死の光は辺りにいるクウラ達を次々と飲み込んでゆく――。

リベジータ Side out

1 side ピツコロ

悟飯達のいるナメツク星人の村へ向けてめいいつぱいとばすピッコロ、メタルクウラ達との戦闘で体力はあまり残ってはいないが1人で戦うベジータを早く助けるために

悟飯の元へ急ぐ。

ピツコロが高速で移動していると前方から強い戦闘力を放つ気が近づいて来る、ピツコロはその気を感じ一旦移動を止め様子を探る、すると

「ピツコロさーん!!」

「お前は悟飯か！ちようどいいタイミングだ！」

氣の正体が悟飯と解り安堵するピツコロ、そして悟飯もピツコロのそばまで駆け寄る。悟飯が正面まで来た所でピツコロが話し出す。

「いいか悟飯、時間が無いから手短に話す。まず今回の黒幕はフリーザの兄のクウラだつた、奴は機械化して復活を遂げていた。そして奴は1人ではなく万を超える数で量産され復活していた。」

「更に奴には再生能力があり全身を跡形もなく消し飛ばさんと何度も復活する。そして最後に、ベジータはそんな相手と未だ1人で戦っている。」

「解らない所があつたならもう一度だけ説明してやる、解つたならすぐにベジータの元へ向かってやってくれ！」

ピツコロは焦る気持ちを落ち着かせはつきりと丁寧だが手短に悟飯に現状を伝える、悟飯は数秒間ピツコロが話した内容を頭の中で整理しピツコロにうなずいて見せた。

そして悟飯がベジータの元へ飛び立とうとした時に2人は目撃する。

ベジータのいた所からかなり離れているにもかかわらず、自分達が吹き飛びそうになる程の爆風、ナメツク星の周りにある太陽の光すら震む程の激しい光、そしてその凄まじい爆発の中で散つていく巨大な気を…。

「悟飯急げ！ベジータを頼む！」

「解りました!!」

衝撃の光景に数秒2人は呆然と静止するがすぐにピッコロが悟飯に動くよう指示を出し、悟飯は我に返りベジータの元へ急いで飛び立つた。

「くそう！いくらベジータの奴でもあれ程のエネルギーを放つてしまつたらただではすまん筈だ。」

「…俺の力の無さを呪うぞ。」

### 『次回予告』

オツス！オラ悟空。何でだベジータ！オメエの超サイヤ人を越えた超サイヤ人なら悟飯が来るまで持ちこたえられたはずじやねえか！

やべえぞ、クウラの奴を何体か狩り損ねてベジータの奴が一方的にやられちまつてる！このままじや本当に危ねえ。悟飯！早くベジータの元へ行つてやつてくれ！

次回 絶対絶命？希望を信じたベジータの博打！

ぜつて一みてくれよな

## 2章 9話

全てを飲み込む死の光が引いていくと地平線の先までも全て消し飛ばした証拠としてナメツク星の形を変える程のクレーターが顔を出した。

クレーターの中心にはボロボロになりながらも何とか生き残ったベジータが地に膝を付き、肩で息をしていた。

この光景を見てベジータ以外に生存している生命体がいると思う者はまずいないだろう。

だが元宇宙の支配者だった者はそんな幻想を打ち碎く様に悪夢という現実を見せつけてくる。

ベジータからかなり離れた所の地面があちこちでもぞもぞと蠢く、そしてその地表から銀色の手や脚があらわれ次々とメタルクウラ達が這い出て来た、数は実に20前後といつた所だろうか。

全員のメタルクウラ達の全身が地上に出終えるとメタルクウラ達はゆっくりと浮遊しながらベジータの周囲を囲む様に近づいて来る。

そしてベジータの半径数メートル以内の所までつくとメタルクウラ達は静止した。

そしてベジータの正面に立つメタルクウラが口を開けた。

「…認めてやろう、貴様の力は宇宙一だつたとな。だがそれで勝てるかどうかは話しは別だ。」

「宣言通り今から貴様への処刑を執行する…覚悟するんだな。」

「ハアアツ!!」

「ガ……ッ!!」

クウラはベジータに処刑宣告をすると間髪いれずにベジータを上空へ蹴り飛ばした、クウラの動きは氣で追えるが身体の動きがそれについて行かずベジータは上空へ突き飛ばされる。

（くつ、やはり超サイヤ人になれなければ拳を交える事すらでき

「さあ、楽しませてもらうぞ。そおら!!」

「がアツ……！」

ベジータが思考を巡らせながら体勢を整えようと試みたが思考が巡る前に先回りしていった別個体のメタルクウラの拳が背中に刺さり殴り飛ばされる。

そこからはひたすら殴り飛ばされ、飛ばされた先に待ちかまえていたメタルクウラにまた殴り飛ばされての繰り返しであつた。

サッカーのパス回しの様に延々と途切れの無い攻撃を受け続け身体じゅうにアザが

でき、あちこちの骨が折れ、内臓の幾つかに穴が空く。

そんなベジータの無惨な姿に満足したのかメタルクウラはバス回しを止めベジータを思いつきり尻尾で地面に叩きつける。

そしてメタルクウラの内の一人がベジータの落ちた地上に降り、胸ぐらを掴み上げる。

「…ゴハツ、ーかツふ、ふつ、ふう…、ク……ソツ」

メタルクウラの猛攻が止んだ事により喉に溜まつた血を吐き出すベジータ、しかし肺が破れているのか呼吸が安定しない。

そんなベジータの様を見てクウラはニヤリと微笑みベジータに話し出す。

「ほう、まだ生きていたとは。そのタフさ流石はサイヤ人と言った所か？その丈夫さの褒美としてこれから貴様の末路を教えてやろう。」

「このあと貴様は俺達を生み出したビッグゲテスターのエネルギー炉に連れて行かれ粉々にすり潰され俺達のエネルギーとなる。貴様にかなりの数を消されたが貴様のエネルギーを吸収できれば俺達はさらなる力を得る事になるだろう。」

「喜ぶがいい、貴様の様な低俗なサル野郎がこの俺の糧となるのだ、光榮に思うが

「————!!」

クウラがベジータ得意気に話していると遠くから何者かの叫び声が聞こえた、声の

方向へ顔を向けると同時にクウラはベジータを掴んでいる片腕を残し跡形もなく消し飛んだ。

そんなクウラが最期に見た光景ら凄まじい密度のエネルギー波と金色に輝き稻妻の様に気を弾けさせている少年の姿であった。

## 2章 10話

—Side クリリン&ヤムチャ —

謎の戦闘ロボットに連れ去られたクリリンと  
ヤムチャはそのままビッグゲテスターという巨大物質内へ連れて行かれ、案内ロボットの誘導の

もとビッグゲテスター内を先に捕まっていたであろう大人数のナメツク星人と共に歩かされていた。

また、全員拘束こそされていないものの周囲には大量の戦闘ロボットが配置されており逃げ出そうとしてもすぐに取り押さえられてしまうだろう。

そんなにやら危うい状況にヤムチャが  
つぶやきぼやく。

「はあ、せっかくあんな辛いベジータとピッコロのしごきを受けたのにこんな様になつ  
ちゃうとはなあ。そもそも神様の代わりを迎えに行くだけのはずだつたのにこんな事  
になるとは…。」

「言わないで下さいよヤムチャさん、おれだつてあんまり活躍できなかつた事、結構

ショックなんですから。」

「とは言つてもなあ。」なあクリリン、ピッコロやベジータ、俺たちを助けに来てくれるかな?」

「来てくれるに決まつてるでしょ!縁起でもない事言わないで下さいよ、ヤムチャさん。」

「いや、解らないぞ。性格がかなり落ち着いたとはいあの2人だ、役に立たなかつた俺らを見限つて見捨てたり…。」

「いい加減にして下さい!ただでさえ気が思い時にこれ以上ネガティブになつてどうするんですか。」

「ハハ、そうだよな。悪かつたよクリリン。」

そんな感じで他愛もない話をしていると

案内口ボットがガラス貼りの部屋の前で止まり

こちらに振り返つた。

ガラス越しに見えるその部屋には拘束具つきの

手術台の様な物と鋭利な刃をきらめかせる巨大でギザギザした円状ノコギリが確認できる。

もう嫌な予感しかしない、そう誰もが想像する中案内口ボットが話し出す。

『ハイ、皆サンオ待タセシマシタ、コレカラアナタガタをスリ潰シマス。』

薄々勘付いてはいたがそれが真実と確定した事で列にいるナメツク星人は恐怖の声をあげる。

そんな中一人の男が動く。

「くつそお、冗談じやないぜ！こんな所まで連れて来られてすり潰されてたまるか。」

そう言い放ち、ヤムチャは案内ロボットの顔面と思われる場所を思いつきり殴りつけた。ヤムチャの拳でロボットの顔面部は軽くへこみ、ビリビリとへこんだ部分から少量の電流が漏れる。

『元気ガアツテイイデスネ♪デハ、マズアナタカラ。』

しかしロボットの機能を停止させるには威力が足りなかつたらしく、ロボットは何事も無かつた様にヤムチャを捕縛し台の上に寝かせ、拘束した。そして機械のスイッチが入る。

するとギザギザのノコギリが高速回転し凄まじい音を放しながらゆっくりヤムチャの元へ迫つて来る、クリリンやナメツク星人達はヤムチャを助けたくはあるが戦闘ロボットがすでに武器を構えこちらを警戒しているため手が出せない。

「や、ヤムチャさん。頑張つて下さい！」

「これをどう頑張れって言うんだよお!!」

何も行動できないクリリンはとりあえずヤムチャを応援する。しかし拘束はきつくヤムチャが力を入れ、身を左右に捩つてもびくともしない。

そうこうして間もなくノコギリの刃はヤムチャのすぐ目と鼻の先にまで迫っていた。

「だ、ダメだあーッ!!死ぬううう…。」

絶望的な状況に思わず目を強く閉じ身体を力ませ刃がその身を引き裂く時を待つた。  
しかしいつまで経つてものそ時は来ない、少々落ち着いて来ると周りでざわざわしている声が聞え出す。

何があつたんだ? そう思ったヤムチャは薄目をゆつくりあけるとそこには先程までのメカメカしい天井やノコギリの刃は無く。

美しいナメツク星の空が広がっていた。

「…へ?」

## 2章 11話

—Side ベジータ& —

ベジータを救つた光の正体、それは超サイヤ人2となつた悟飯のエネルギー波であつた。その圧倒的なエネルギーから超サイヤ人の頃とは比較にならない威力であつた。

ベジータの元へ到着した悟飯はすぐさまベジータの周囲にいたメタルクウラ達を跡形も残らぬ程に粉々に消し飛ばした。

そしてベジータから少し離れた位置にいたメタルクウラはこのままで勝てないと判断し、ビッグゲテスターに退散しようとしたが悟飯はそれを逃がす事なく巨大なエネルギー波を放ち、全てのメタルクウラを消し飛ばした。

周囲に敵がない事を確認した悟飯は重傷を負つたベジータの所へ駆けつけた。  
「ベジータさん、大丈夫ですか！僕が今すぐにデンデの所へ連れて行つて治療してもらいます。だからもう少しあ

「…悟飯、まず落ち着け、そして黙つてオレの言う事を聞くんだ、いいな。」

「ベジータ…さん？」

悟飯はベジータを励ましながら運ぼうとしたがそれをベジータが制止させる、一体何

事かと悟飯は疑問に感じたがとりあえずベジータの話を聞く事にした。

「いいかよく聞け、クウラ達は人間をビッグゲテスターという施設に集めそこで人間をすり潰し

奴らのエネルギーにすると言っていた。ここからしばらく行つた先に大量のナメック星人の気を感じる、クリリン達も恐らくそこに連れて行かれたのだろう。」

「オレは一人でピッコロ達が待機している村まで戻れる。だから悟飯、お前は今すぐビッグゲテスターに迎え。」

「それと最後に、お前が今クウラ共を屠つた力。

それが超サイヤ人を超えた超サイヤ人の段階、超サイヤ人2だ。その形態になつた感覚、絶対に忘れるんじやないぞ。」

「オレから話すのは以上だ、早くビッグゲテスターへ行け。間に合わなくなつても…しらん…ぞ。」

そう言い残すとベジータは意識を失つていた。

悟飯はベジータの言う事を聞きすぐにビッグゲテスターへ向かいたかつたが、その優しさからベジータを見捨てる事ができなかつた。

思わずベジータに手を差し伸べようとする悟飯、

その直後悟飯はある事に気づきベジータに手を差し伸べるのを止め、ビッグゲテス

ターへ飛び立つた。

ビッグゲテスターに到着した悟飯はヤムチャとクリリンの気を探る：必要も無く2人を発見する事ができた。

どうやら逃げるメタルクウラを倒すために放った悟飯のエネルギー波はメタルクウラを消滅させ、そのまま地表上を進みビッグゲテスターを貫き全体の3割の部分を削り取つていた様だ。

削りとられ露わになつたビッグゲテスターの内部に拘束台に拘束されたままのヤムチヤ、そのヤムチヤを助け出そうと拘束具を引き剥がそうとするクリリンやナメック星人の若者達。

そして待機しているナメック星人達にビッグゲテスターの一部崩壊が原因かショートして動かなくなつてている戦闘ロボットの姿が確認できた。

ひとまず悟飯はヤムチヤを救出しみんなと合流する事に成功した。

「オノレ、忌々シイ猿共メ。コウナレバ最終手段を使ワザルを得ナイカ。シカシ、必ズキサマラハコノ手デ根絶ヤシニシテヤル、覚悟シテイロヨ。」

## 2章 ——話 ある魔術師の記録3

### —研究記録—III—

『アクアミストを元に同質の物を、ボクの魔術で培養する実験を開始した。』

『一週間程時間をかけ、何とかアクアミストと近い物を作成する事に成功した。早速ボクの洗脳が効かなかつた悪人では無い異星人に使用し、効果を確かめて見よう。』

『早速シャモ星で採取した鳥型の異星人、

シャモ星人に試作型アクアミストを投与した。

するとシャモ星人のクチバシがやや鋭くなり、

爪が伸び小さなナイフの様に変質し、目つきも

鋭く変化した。

『そしてなにより試作型アクアミストを投与

する前は無かつた邪な心が確かに芽生えていた、恐らくこれが「魔族」に変化したと  
いう事なのだろう。アクアミストの作製は成功としていいだろう。早速そのままシャ  
モ星人を洗脳し下僕にしておき、今日は眠る事にした。』

『翌日、被験体だつたシャモ星人を確認した所何と姿がアクアミスト投与前の状態に戻つていたのだ。しかし洗脳の印である額の【M】のマークは消えておらず、ボクの命令にもしつかり忠実に従う。どうやら洗脳は解けていない様だ。』

『どうやらボクの模倣品のアクアミストだと人間を魔族にする効果は時間が経つと消えてしまう様だ、でも洗脳の効果は消えないみたいだから大きな問題では無いね。次はどの位効果が継続するか調べてみようか。』

『と言う事で次の様にモルモットを用意した

- ・平均的なキリの悪心を持たない地球人
- ・地球人の中では高いキリの悪心のない地球人
- ・平均的なキリの悪心を持つ地球人
- ・平均的なキリの悪心を持たないシャモ星人
- ・シャモ星人の中では高いキリの悪心のないシャモ星人
- ・平均的なキリの悪心を持つシャモ星人
- ・平均的なキリの悪心を持たないアプール星人
- ・アプール星人の中では高いキリの悪心のないアプール星人

・平均的なキリの悪心を持つアプール星人

これらの被験体にボクの試作型アクアミストを投与し、どの位時間が経過するとアミストの効果が切れるかを実験した。』

『すると結果は何と人種、戦闘力、悪心の有無全て関係なく、一律で効果は2時間程という事が判明した。同様の実験を100回程行つたが見られた誤差は数分、数秒程度であり。その誤差もこれが原因と特定できるものは無かつた。』

『またこの計1000人弱を再度アクアミストを投与した後に洗脳したが魔族化は時間通り解けても洗脳は解ける事はなかつた。』

『そして魔族化が解けた後、洗脳が続いている本来悪心を持つていなかつた被験体からエネルギーを採取した所何と魔人ブウ復活のエネルギーに使用する事ができたのだ。』

『これを活用すれば魔人ブウ復活にグンと近づけるだろう。早速ボクはこの試作品アクアミストを更に培養、及び広範囲に拡散出来るように改良を進めていく事にする。』

『なお今回使つたモルモット達は人造人間改造を行い兵士にする事にした。また人造人間手術に適応しなかつた者、基準未満の戦力にならなかつた者は魔人ブウ、培養中のセルへのエネルギー源として生体エネルギーを全て抜き取りヤコンの餌とする。』

## 2章 13話 次のステージ

ビッグゲテスターを完全吸収し、巨大化した

メタルクウラを相手に悟飯は互角の戦いを繰り広げた。

しかし、クウラが周囲にいるナメツク星人やナメツク星そのものに攻撃のターゲットを変える事により戦況は一転、悟飯は星や仲間を守るため防戦一方となつてしまう。

周りを守つていても悟飯の身体に傷が一つ、また一つと増えていく。さらに気の方も長期戦によりジリジリと削れてゆく。

そして、ついに悟飯の超サイヤ人2が解けてしまう。これを好機としたクウラはありつたけのエネルギー波を悟飯に向けて放つた。

(負けた...) 悟飯は思わず小さく呟き自分の死を悟り身体の力が、気が抜けていった。

「何をへこたれている、悟飯！俺達はお前をそんな腑抜けに鍛えた覚えは無いぞ。戦士なら、最期まで戦いから背をむけるな！」

「カカロット

の様にな...」

その言葉に悟飯は、はつとして顔を上げる。

そこにはエネルギー波を両手で抑えるベジータとピッコロの姿があった、ベジータは悟飯と別れたあとピッコロが連れてきたデンデにより治療を受け復活を遂げたのだ。

「説教は後だまずはこいつを吹き飛ばすぞ！」

行けるな、悟飯。」

「はい！」

悟飯の目にもう絶望の色は残つていなかつた。

クウラのエネルギー波はベジータのギャリック砲、ピッコロの激烈光弾により完全に抑えられ悟飯には1滴足りとも届く事は無い。

「か…

悟飯は腰に両手を構え安全に、綿密に気を溜めていく。

「め…

悟飯の黒髪が逆立ち、悟飯の周りに金色の気が点滅する。

「は…

エネルギーの塊が青く輝き周囲の光が、太陽の光でさえ暗く霞む。

「め：

悟飯の髪が、纏つていてる気が金色に染まりきりる。

「波ああああああ!!!!」

悟飯の全ての気が放出される、放たれた特大のかめはめ波はベジータとピッコロのエネルギー波と混ざり、増大し、拮抗していたクウラのエネルギー波を思いきり押し返していく。

「ばかな！そんな、死に損ないどもなんかにいいい!!」

3人の合わさった気、そして跳ね返ってきた自分のエネルギー波に飲み込まれメタルクウラはビッグゲテスターもろとも完全に消え去つていった。

クウラの騒動が收まり、改めて新たな最長老であるムーリがナメック星人の代表として感謝の言葉を送る。

「再びナメック星を脅威からお救いいただきありがたい限りです。

悟飯くん、クリリン殿、ピッコロ殿、ヤムチャ殿、天津飯殿、チャオズ殿、そしてベジータ殿。この度は本当にありがとうございました。」

「…、礼を言われる事ではない。あの時は迷惑をかけたな。」

ムーリの言葉にばつが悪いのかベジータは素つ気ない態度をとつた。

「…確かにあなたは過去に我々の仲間を大勢殺めました、その事を我々が忘れる事は決して無いでしよう。」

しかしあなたが我々を救うため身を呈していただいたこともまた事実。この事への感謝の意も決して我々は忘れません。」

「…フン、それはお前たちの好きにしろ。」

「おいおい、最長老さんもこう言つてるんだ。 そう恥ずかしがるなよお前らしく無いじゃないか。」

「やかましい！」

最長老の言葉でベジータはさらにばつが悪くなる。それを見たクリリンがニヤニヤしながらベジータへと声をかけベジータがつっこむ。

二人がそんなやり取りをしているとムーリがじつとベジータの方を見ている事に気づいた。

「ん、どうしたんださつきからジロジロと…。」

「ああいえ、すいません。最長老になり改めてじっくり見てみるとあなたの中に眠る凄まじい潜在能力が見えまして。」

「潜在能力？」

ムーリの言葉にピンと来ず、オウム返しに言葉を返すベジータ。

そんなベジータにムーリが話を続ける。

「はい、あなたはとても鍛えている様ですがまだまだ底なしのエネルギーがあなたの更なる成長を待ち望み眠っています。

これまで先の見えない潜在能力は初めて見ます。

これもこの星を救つていただいたお礼です、引き出せるのはほんの僅かかもしませんがよろしければその力、

引き出してさしあげましょか?」

「ほう。」

(相手の潜在能力を測る、ナメック星人にそんな能力があつたのか?)

確かに俺の身体にはまだまだ進化の余地はある、せつかくの機会だどんなものかは解らんがなにかいいキツカケを掴めるかも知れん。)

「ああ、頼もう。」

ベジータは潜在能力の開放を依頼する。その旨を承ったムーリはベジータの額に手をかざし、静かに目を閉じた。

「それでは行きますよ、ふん……」

ムーリが軽く力を込めるべジータの身体が青白く輝いたそして…。

(…!!なんだこれは!!)

突如ベジータの身体の奥から凄まじい量の気が溢れ出てくる。そのあまりの量にベジータは身体の内側から弾け飛び飛びそうになり、それを必死に抑え込もうとする。

しかし溢れる気は収まるどころか激しさを増し体内を濁流の様に駆け巡る。それに耐えかねベジータは急いで上空に飛び上がる、そして…。

「くつ…くうああああ…つ…！」

「くううう…。…はああああああ!!!!」

ベジータは体内の気を思いつきり体外へ発散させた、気がつくと髪は金色に染まり超サイヤ人と化していた。

…しかしいつもと様子が違う。  
「…何だこの極限までに凝縮された気は、この充実した気の感覚、だがなぜか身体に覚えがある。」

「超サイヤ人2とはまた次元が違う、これがカカロツトとは別の中たな超サイヤ人のステージ…！」、くつ。」

自分の身体の進化に心踊らせるベジータ、しかしその喜びもつかの間元の黒髪の姿へと戻ってしまった。

。

## 『界王神界』

「感じましたかキビト！先程のとてつもないエネルギーを。」

「はい、界王神様。これ程までの力を持つものがまさか下界に現れるとは…もしや魔人ブウが復活したのでしょうか！」

「いえ、邪心のないおだやかな魂…という訳ではありませんが。純粹で筋の通った力強い魂でした。恐らく下界の人間でしょう。」

「そんなバカな！まさか人間が我々の力を超えるなど…。」

「信じられませんが事実の様です、しかし悪い事ではありません。もしその方が我々の味方になつてくれるとなれば魔人ブウ復活の阻止に大きく近づく事ができるはずです。」

「しかし…」

「はい、キビトの思う通りです。先程も言つた通り邪心が無いわけではありません、場合

によつてはバビディに洗脳される可能性も出てくるかも知れません。

そうなると我々は詰みです、だからこそ早く接触しないと。」

## 2章 14話

「すいません、ワタシが未熟なばかりに中途半端にしか潜在能力を引き出せ無かつた様で。」

「…いや気にするな、むしろ今ので何かを掴めた。感謝するぞ。」

(…今はビルスと戦った時になつた超サイヤ人なのか？あの溢れんばかりのエネルギー、超サイヤ人2のレベルを明らかに上回つていた。

まさかこんな所で次の段階へのキツカケがつかめるとは。

…人助けもしてみるものだな。)

想定をしていなかつた自分の進化に驚きながらも確かに見えた次のステージに闘志を燃やすベジータ。

そして文字通り一段桁の違う力を前に乙戦士達はそれぞれ様々な感情を抱いた。

そんな中、1人のナメック星人の青年が声をかける。

「そういえば皆さんはどの様な用事ナメック星にいらしたのですか？」

フリー・ザの一件の後に我々は銀河の外れにあるこの星へと移住しました、あの奇妙な機械達から我々を救いに来て下さつたにしては到着が早すぎます。

皆さんは何か我々にご用があつたからこの星にいらしたのでは?」

「おつとそだつた! 本来の目的を忘れる所だつたよ。実は地球で…」  
ナメツク星人の青年の一言で本来の目的を思い出す一行。

乙戦士達の中でも特に社交性のあるクリリンが地球であつた事、地球上に新たな神が必要になつた事等をナメツク星人達に伝えていく。

「そうでしたかそれなら適任の者がおります、おーいデンデ。」

「はい!」

「いいつ!?

ムーリが指名した予想外の人物にクリリンは驚きの声をあげた、またデンデの幼い姿を見てベジータとピッコロを除く乙戦士達も思わず目を見開いた。

「こう見えてデンデは優秀な龍族、きっと良い神様になりますぞ。」

「へえーお前そんなにすごい奴だつたんだな、またよろしくな、デンデ!」

「はい、よろしくお願ひします! クリリンさん、悟飯さん、そして地球の皆さん。」

「こちらこそよろしくね、デンデくん!」

デンデは村の皆に旅立ちの言葉を伝え悟飯と共に宇宙船へと乗り込む、他の乙戦士達

も次々と宇宙船へと乗り込んでいった。

「あれピツコロはまだか? まさか故郷の雰囲気が気に入つてここに残りたくなつたと

か。」

「勝手に置いていくな、：待たせたな出発してくれ。」

「ピッコロさん、確かに最長老様と話をされてましたが何かあつたのですか？」

他のZ戦士達と少し遅れて宇宙船に乗り込んだピッコロ、彼が最長老と話していた所を目撃していたデンデは何を話していたかピッコロに問い合わせた。

「大した事ではない、奴に少し最長老様の顔を見せてやりたいと思つて軽く会話をしていただけだ。」

「なるほど！ネイルさんの事を気遣つてくださつたのですね、ありがとうございます。」

「なに、気にするな。」

疑問の答え合わせができ納得したデンデ。他のZ戦士達も表情を和ませ、宇宙船を発車させた。

「最長老様、あの事を話されたのですね。」

「うむ、やはり彼等は噂の二人組とは違うようだつたからの。」

「でしたらなぜあの事を彼等全員に話され無かつたのですか？彼等の今回の活躍で全員を信用しても問題はないと思います。」

「大した理由ではない、念のため：そしてできればナメック星人である彼にこの事を解

決してほしかつたからじや。」

『ネイル：いや、今はもうピツコロだつたな少し良いか？』

『どうしました？最長老様。』

『実は最近星々の間で不吉な噂が流れているようでな、

確認をしておきたかつたんじや。』

『不吉な噂？』

『うむ、ナメック星人とサイヤ人の二人組が率いる集団が様々な惑星を荒らして滅ぼしているそうなのじや。

さらにそいつ達に荒らされた星は草一本生えない枯れ果てた惑星になるという。』

『！』

『サイヤ人もナメック星人も我々の他に生き残りがおるとは思えんが、気にはとめておいてほしいんじや。

もしかしたら我らやそなたらに災いとして降りかかるかもしけぬ。』

『わかりました最長老、ご忠告感謝します。』

### 3章 1話 接触

「りやあ！りやりやりやりやりやりやあーっ！！」

「ほああつ！てりやつ！でや、だりやあ！！」

ナメツク星での騒動から数ヶ月、デンデにより神龍は復活し地球も平和そのものだつた。

その平和の中で戦士達は修行の日々に明け暮れる、今も神の神殿でピツコロとベジー

タの激しい組み手が神殿の空気を大きく震わせてる。

来る魔人ブウ復活に向けて

「ふん流石だ、超サイヤ人のオレの攻撃を完璧に見切つているな。だが…ふんっ！」  
(くつ、問題はやはりここからか。)

気の密度が上がり圧に耐えきれなくなつた気がスパーク状に弾ける、言わずと知れた超サイヤ人2である。

「さあ、どこまで食らいついてくる？ピツコロ!!」

「さあな、どうであろうと全力でぶつかるまでだ。ちえああーっ!!」

…。

「ふう、こんな所か。なかなかだつたぞピッコロ。」

「妙な気遣いはよせキサマらしくもない、ハツキリ言つたらどうだ？…完全に伸び悩んでいる。お前との差も開く一方だ。」

「キサマらしくない…か、その言葉そのまま返してやる。修行の成果に対して焦つても意味は無いだろう目先の戦闘力ばかり見ていると大切なキツカケを見失うぞ。」

「…お前に言われるまでもない。」

（いつてくれるぜ、そんな事とつくりに解つてゐるさ。だがナメツク星であれだけの差を見せつけられて焦らずにいられるわけがないだろう。）

キサマだつて少し前までは目先の力に囚われていたくせに、おつとそれはこちらの世界のベジータだつたな。

今は遠くばかり見やがつて、自分自身のその先の何かを。

…まるで孫の様に。）

「まあいい一度休憩を挟むぞ、夕方からは悟飯も訓練に参加してくる。それまでゆつくりさせてもらう。」

「ああいいえ、デンドンデは神殿の中にいるのか？治療を頼みたいのだが。」

「確かに珍しいないつもなら俺達の組み手を横で眺めているんだが、少し耳を澄ます  
…。」

ベジータが神殿で修行するのはピッコロや悟飯と言った後に必要になるであろう戦力の育成も理由にあるのだが、

1番の理由はデンデの存在にあつた。

デンデがいる事で無茶な戦闘で大怪我を負つてもすぐに治療ができるためより実戦に近い本気の手合わせができるからである。

当の本人も乙戦士達の成長を見るのが気によく入り外で修行を眺めて、ケガをした時に乙戦士達の治療を手伝っている。

しかし今回はデンデの姿が見当たらない、デンデの様子を確認するためピッコロは耳を澄ます。

「…む、誰かと神殿の中で話しているようだ。

だが妙な話し相手の気が全く感じ取れない、相手は一体何者なんだ？

…！こっちに来る様だ。」

(オレも気を感じ取れない…まさか!!)

得体の知れない何かがこちらへゆっくりとやつてくる、

デンデの様子からして敵ではなさそうだが。

神殿の影からデンデ共にそれは姿を現す。

薄紫色の肌に独特の白いモヒカンヘアー、尖ったエルフの様な耳には黄色いイヤリン  
グの様な装飾品を身に着けた少年の様な風貌の男。それがこちらを見てゆつくりと歩  
み寄りこちらに話しかけてくる。

「貴方がベジータさんですね、貴方にぜひ話したい事があります。私の話しを聴いてい  
ただけませんか?」

(ま…まさかこんなに早く接触できるとは、思つてもない幸運だ。)

「…も、もしや大界王さまでは?」

ピッコロが、驚きに震えた声で尋ねると相手は優しく笑いこう返した。  
「惜しいですが、少し違いますね。」

| 私は、界王神と呼ばれる者です。

### 3章 結構先の話

「ハア、ハア。これで終わりです。」

「ぐつ、ぬう……。」

首を蹴り飛ばし頭のみとなり地面に転がるセルに向けて悟飯が手をかざす。

ダーブラの細胞を取り込み、バビディの魔術によつて強化されたセル。

そんな奴を一撃で頭の核ごとまとめて完全消滅させる事は叶わないと判断した悟飯は何度もセルの身体を破損させ、再生を繰り返させる事によりセルの気の総量を消耗させ減らしていく。

そして最後の仕上げに首から上を蹴り飛ばし核の逃げ場を無くし確実にトドメをさせるよう自らの手に気を溜めこの勝負に王手をかけた。

「ぐふふ…私はこのまま死ぬがこの勝負、私の勝ちだ！」

「何、ぐつ!!」

死に際のセルの突然な勝利宣言にほんの僅かに気を取られた悟飯、そんな悟飯の背中から貫かれるような痛みが走り身体に何かが流れ込んでくる。

痛みの正体を知るべく首を背中の方へ向けると横たわるセルの胴体から外れた尻尾

が悟飯の背中に突き刺さつていた。

「くっ、くそお!!」

急いで背中に刺さつた尻尾を引き抜く、しかし全ては遅かった。

身体の奥底からじわじわと滲み出る憎悪のような感情が溢れると共に禍々しいながらも力が溢れてくる。

そんな未知の苦痛に見を捩りながら悶えこらえる悟飯の脳内に不快な声が響く。

「ふつふつふ、頑張つて抵抗しているみたいだけどムダだよん。

なんせ本番はここからだからね！」

パンパカパーン!!

「がああああ…っ!!」

奇妙な掛け声を合図に悟飯の頭に耐え難い激痛が走る、

ついにその苦痛に耐えきれず頭を抱えその場に膝をつく。

そんな悟飯にトドメをさすように頭痛に憎悪、そして自分の底にある感じたことの無い膨大なエネルギーが先程より更に増して土石流のように身体から溢れ出す。

「グッ、ぐっ…はあああああああ!!!」

そして全てがピークに達した時、凄まじい邪気が周囲に放たれ足場の地面が大きくえぐれ、周囲に暗雲がたち込み紫の稻妻が走る。

そしてゆっくり顔を上げた悟飯の額にはセルや他のバビディの手下にもあつた『M』の文字が刻まれていた。

「ふふふ、あーっはっはっは！大成功だ、全て上手くいったぞ！！セルと悟飯つて奴を戦わせる事で魔人ブウの復活エネルギーを大きく集める事ができた！」

極めつけはその悟飯をセルに持たせたアクアミストを使って僕の下僕にすることも成功したぞ、これで忌々しい界王神の連れているサイヤ人と悟飯を戦わせれば確実に魔人ブウは復活する。

悟飯が宇宙船で逃した何人かの地球人もヤコンに追わせたから時期に始末できるよね。

ダーブラたちを失つたのは勿体なかつたけどこれで界王神に復讐ができるぞ！」

「ふふふ、どうやらうまく行つたようだな…」

全ての流れを見届けたセルは満足げにそう一言残し口が開かなくなる。

幾度となく再生と戦闘を繰り返し、最期に悟飯にアクアミストを注入する事により遂にセルの頭の核はエネルギーを使い果たし活動を停止した。

### 3章 結構先の話2

「ああつー！そんな、まさか悟飯さんがバビディに操られてしまうなんて。」

「ぐぐぐ、まずい事になりましたな。」

「…。」

地球のウンザビット高地、地球での騒ぎに気づき界王神界から瞬間移動をしきビット、シン、ベジータの3人が地球のこの地へ足を降ろした。

しかし地球の異変に気づくのが遅れ3人が到着した頃には既に遅かつた。大きな決戦は終わり新たな脅威が地球にそびえる。

「どうやらブルマさんやチチさん、トランクスくん達はナメツク星へ避難を済ませているみたいです。」

そして悟飯さんは…、どうやらとある荒野で仁王立ちをしています。

「私達を待ち構えているのでしょうか。」

「どうであれ行くしかないだろう、恐らくバビディ達もそこにいる。」

「で、ですが。」

「界王神様、ここはベジータを信頼し任せましょう。」

確かに罠にしか見えませんがどの道ここでじつとしていても状況は何も変わりません。」

荒野で悠々と待ち受ける悟飯、見るからに罠のように思えるのでそこへ向かおうとするベジータを界王神が止ようとするが、それをキビトがとめた。

「仕方ありませんね、私も覚悟を決めます。」

「行くか。」

そうして3人はウンザビット高地を後にした。

とある荒野にて、ついに来たかとこちらを見据え立つ悟飯。

髪は黒く超サイヤ人にはなつていないうが、纏う気は荒々しく額には洗脳の証であるMの文字が浮かびあがっている。

また悟飯の足元には荒野には相応しくない金属でできた円状の床がありその中心には地中へと続く穴のようなものが口を開いている。

ベジータ達が悟飯の正面へと降り立つと少しの間沈黙しあいを見合う。

そして軽く戦う相手を見定め、悟飯がゆっくりと口を開いた。

「…、戦いの場所はこちらで用意しています。覚悟は十分みたいですね。僕についてきてください。」

そう言い終えると悟飯は小さく跳ね、そのまま地下へと続く穴へと降りていった。ベジータと界王神達はお互いを見合い小さくうなずいてから悟飯を追い、地下へと入つていった。

下へ続くと円状の広い空間にたどりつく。

ベジータ達が降りてきた事を確認し悟飯は臨戦態勢に入り構えを取るが、今度はベジータの口が開いた。

「悟飯、今はふざけている場合じゃない。

そこをどいてくれ、お前の事だその気になればバビディの洗脳なんぞ自力で引きはがせるはずだ。」

「ええっ！なんですって！」

ベジータの言葉に驚きの声を出す界王神、それが当然だというように宇宙船のどこから声が響く。

『あーっハツハツハッ！いきなり何を言い出すかと思えば、命乞いかな？あの魔界の王ダーブラ、それに沢山の戦士やダーブラの細胞を加え完成させたセルとかいう人造人間だつてボクの洗脳から逃れることはできなかつたんだ。

そんな事ができるやつなんてこの世にいない！

さてはボクの力で強くなつた悟飯に実力が逆転されてビビつたんだろう？でも残念

だつたね、キミは界王神側についたんだ、魔人ブウ復活のエネルギーを榨り取つたあと  
は界王神達と仲良く死んでもらうよ。

さあ、行け悟飯！ ヤツと界王神を殺すんだ!!』

バビデイの言葉で悟飯の額のMの文字が怪しく光悟飯は超サイヤ人2へと覚醒する。  
が、ベジータ達へと襲いかかる事は無かつた。

「気づいて、いたんですねベジータさん。」

悟飯が小さくそうつぶやくとまた宇宙船から五月蠅い声が響く

『おーい！ 行けって言つてるだろ。何をしているんだ早く界王神たちを  
「うるさい!!!』

バビデイの声に対し怒号を一つ放つ。その時声と共に発せられた気の大きさは反射  
的にベジータが超サイヤ人2に変身し身を構えさせ界王神達を大きく後退させるもの  
だつた。

「…、今は少しへじータさんと話したい。その後しつかりベジータさんとは戦つてやる  
だからお前は今は黙つていろ。」

## 編

## 章　　話　希望の再誕

とある時間軸の地球で。

ポタラの合体時間が解け、身体の分離が始まつたザマス。合体が溶けぬよう必死にもがくザマスをトランクスが一太刀で一刀両断、決着はついたかに思われた。

しかし真つ二つになつたザマスの肉塊が合体ザマスの状態で蘇ってきたのだ。

衝撃的状況に驚愕する乙戦士達、このままではまずいと判断したベジータは残る力の殆どを絞り出しガンマバーストフラッシュを放つ。強烈なエネルギーの奔流が2柱の狂神を呑み込みその姿を肉片へと変えてゆく。

『やつた』 そう確信し気が安堵する乙戦士達。

「しかしその安堵が絶望に変わるのはそう遅く無かつた。

人々になつた肉片の一つ一つがザマスの姿へと変貌してゆく。ガンマバーストフラッシュの爆炎が晴れる頃には視界内の至る所までザマスで埋め尽くされていた。

「…。トランクス、お前はあの女を連れてオレ達の時代へ逃げろ。そしてこの事をビルスに伝えるんだ、時間は稼ぐ。」

「そんな！ 時間稼ぎなら俺がやります、だから父さん達がタイムマシンで逃げて下さい！」

「もともとこれは俺達の時代の問題なんです、それなのにそつち時代の父さんまで死んでしまつたら俺は…」

「グダグダ言うな、これは命令だ!!」

「っ！」

ベジータの時間稼ぎと言う発言に対し、自ら囮役を買って出ようとしたトランクスをベジータが叱りつける。突然怒られトランクスは驚き顔が引き締まつた。

「いいか、本当にこの時代の責任を取りたいのならお前のすべき事は奴らを倒す事だ！」

「だから今は逃げ延び力を蓄えろ、そして必ず奴らを倒すんだ。心配するな、オレの時代には破壊神もいれば悟飯もいる、お前一人じやない。」

「父さん…。」

「さあ、これでお前のするべき事は解つたはずだ。だつたらさつさと行け間に合わなくなつても知らんぞ。」

「…グッ。すいません。父さん、俺は必ずっ！」

ベジータの言葉を聴きトランクスは歯を食いしばり、流れそうな涙を堪えこの場を後

にした。

父が託した希望を胸に。

「へへつ、ゆうようになつたなベジータ。」

「ふんつ、何とでも言え。」

「最期の別れは済んだかサイヤ人、まあ逃げようが残ろうが死ぬ未来に変わりはない。お前達を片付けトランクスが時空を越える前に始末するのは今の我々にとつて造作もない事だ。」

ベジータ達の会話が終えると、先程まで悠々とこちらを見ていたザマス達の内の1人が話しかけてくる、そして言いたい事を話終えるとザマス達が構え始める、いつ戦闘が始まつてもおかしくない状況となつた。

「ははつ、本当に参つたなあ。せめて仙豆が残つてたら…」「おい、カカラツト。」

悟空が仙豆が残つていなか道着の中を探つているとベジータが声をかけた。ベジータの話を聞くため悟空は行動を止める。

「オ…オレとフュージョンしてくれ、今のオレの力ではトランクスは逃げ切れん。せめてあいつらが逃げ切れるまでの時間を稼ぐ力が必要なんだ！」た、頼……むッ！」  
「ベジータ…。」

ベジータの提案、それはフュージョンをして時間稼ぎをし、トランクスを逃がすのを手伝ってくれと言うものだつた。生涯で越えると決めたライバルへの懇願、自分の無力を認めるともゆえるそれがよほど悔しかつたのだろう。ベジータは強く歯を食いしばり過ぎ、奥歯が砕けその血が頬を伝い落ちてゆく。

「へつ、本当にらしくなくなつちまつたな。ベジータ。」

「…くうツ!! 何とでも言

「時間稼ぎじやねえ、ザマスをやつつける。そうちだろ? ベジータ。」

「!!」

「…ふつ、オレとした事が。だいぶ参つていた様だな。」

「行くぞ、カカロット!!」

「おう、ベジータ!!」

「フュー…ジヨン! はつ!!」

地球上に突如青きの光の柱が現れる。その光は天を貫き、宇宙を照らした。

「…キサマ何者だ?」

「オレは悟空でもベジータでもない。俺はキサマを倒す者だ。」

# 絶望を切り裂く

「我々を倒すだと？」

無数のザマスの内の一人がゴジータの正面へと降り立つ。

「キサマから感じる2つの命が混じりあつて生まれる氣、なるほど。メタモル星に伝わる融合術を使つたか。」

「はつはつはつは、しかし悲しいな。体力の底をついたか、はたまた神の神具を模倣した愚かな技で産まれたからか。ポタラで融合した時よりも随分と力が落ちているぞ。」

「その様な悪あがきをした所で

神の裁きにあら――：

ザマスが言い終える前に、その身体が中央から霧の様に霧散してゆく。ザマスが完全に消え去つたそこには正面に突き出されたゴジータの右拳があつた。

「ポタラとフュージョン、どちらの方が強いかは興味無いけどよ、どちらでもキサマらをコケにできる事には変わり無さそうだぜ。」

ザマスを一人消し去つたゴジータはニヤリと微笑む。

「ふ、ふざけるな!! ポタラで融合した時ですら私一人を仕留めきる事ができなかつたのだ! 今更また融合した所で我々に敵うはずが無いいいい!!」

「それはどうかな? …はあああ!!!」

そう叫ぶと一斉にゴジータの側にいた数十ものザマスがゴジータに飛びかかる。が、ゴジータが天へ向けて両手を突き出し気を周囲に発散させる、すると飛びかかったザマス達は溢れ出る気の波に飲まれ十数体はチリへと消え去り残りは台風に飛ばされてゆく紙屑の様に吹き飛んでゆく。

「く、くそ。こんな事が

「ベジットで戦った時は悪かつたな、あの時は二度と合体する事はもう無いと思つてたからな。試してみたくなつてつい遊んじましたんだ。最高の力を掛け合わした究極の力を最大の敵にぶつけてな。」

ゴジータに吹つ飛ばされ体制を立て直そうとしていたザマス、突然後ろから聞こえた声にハツ!となり後ろを振り向こうとするがその前に拳が腹を貫き、腕から流れ出るゴジータの神の気によりまた一人跡形もなく消え去つた。

「だが今回は違う、オレがお前等より強い事はもう充分に解つた。だから今度は残る命全てを燃やしきり全力を超えた力でキサマラをたおす!」

消し去つたザマス内の一體にそう言い捨て、残るザマスの集団に向けゴジータは再び

構えをとつた。

「く…、う、撃て！撃てえ！！」

一体のザマスがそう叫ぶと、ザマス達はゴジータを遠巻きに包囲するように散開しながら豪雨の様に気弾をゴジータに浴びせる。

しかしゴジータの強さに怖気づいたのかゴジータに接近する者は一体もおらず、それどころか数体がこの戦場から離れて行つている姿も確認できた。

「フン、そんな弱腰な攻撃じやオレ達は倒せない：なつ!!」

一方ゴジータは気弾の爆風の僅かな隙間を縫う様に動きながら周りの様子を探り、ザマスがより密集している所を見つけそこへ向けて跳躍し

「波あああーっ!!!」

「ああ…つ

「この人間如きがあああ!!」

また数体のザマスがエネルギー波に飲み込まれ消滅する。そして今度はエネルギー波から逃れれた2・3体程のザマスが半ばヤケになり手に剣状の基を纏い、ゴジータに斬りかかる。

「ほ、ふんつ！ それえ、はつ!!」

「ぐつ！」 「なつ、」 「なああつ！」

しかしゴジータは最初に斬りかかつたザマスを左手で弾き飛ばし、次に飛び出てきたザマスの突きを避けその腕を掴みそのまま近くにいた別のザマスへ向けて投げ飛ばしエネルギー弾で追撃を与えた。

「どうした、数が増えてもこんなものか？」

「!!しまった！」

ザマス達を次々と倒し更に一網打尽にするため煽りを入れたゴジータだつたが、いつも向かってくるザマスを迎撃ように周囲の気を探つた事によりある事に気づく。

先程逃げたと思つていた数体のザマス、それらが何とトランクスの方へ向かつていたのだ。

「チツ、クソツタレがあ!!」

「バレたか！だが奴らをトランクスの元へ向かわせるのは阻止せねば。

これ以上人間に時空の超越を許してなるものか!!」

希望へ向けて飛ぶ青き閃光、その光を流星群の様に無数の禍々しい光が青き光を追う。

## 増える指輪

「ウイイイイイン…」

「マイ！父さん達の時代に飛ぶ、しつかり捕まつていってくれ!!」「ええ、解つたわ。」

トランクスがタイムマシンを操作し、時空を跳躍する準備を整える。タイムマシンは少しづつ浮遊していきそして強烈な光が辺りを照らす。タイムスリップまであと僅か、そんな刹那の時間にそれは起ころ。

「逃さんぞニンゲン!!」ここで仕留めてくれる!!!」

「ざま…」

B O O O O O M ! ! !

ザマスの放った紫色の気弾がタイムマシンへ向け一直線に飛んでいく、その紫色の気弾に蒼色の気弾が真横からぶつかり軌道を逸らそうとするが軌道が逸れきる前に紫色の気弾が突然破裂し、それに続いて蒼色の気弾も誘爆。

黒い爆煙がタイムマシンを飲み込んだ。

「トランクス——!!」

至高の戦士が爆煙に向かつて叫ぶが、煙が晴れたそこには何も無い虚空が広がっていた。

「ふふふ、はあーっはつはつは！ 我の裁きの光に飲まれこの世から消え去ったか、それとも先程の衝撃で時空の狭間に飲まれ永遠に闇の中を彷徨う事になるか。罪人にふさわしい結末だ、そうは思わんかサイヤ人。」

皮肉を交えてザマスがニヤリと微笑む、至高の

戦士はただただ無言で肩を震わせていた。

——青い風が泣いている。

「父さあああああんんんんんん！！！：：。」

タイムマシンが激しく揺れる、ザマスの攻撃により損傷した機体がゆがみ荒れる時空の裂け目を流される様に移動していた。

凄まじい衝撃が時空を越えるトランクス達を襲う。

父が繋いでくれた希望、ここで絶やす訳にはいかないと衝撃に抗い踏ん張り続けるがとても耐えきれそうにない。

意識が遠のいていきもうダメだと思った時、トランクスの心の歪みに様々な思いが過

る。

『悟空さんが、父さんが死んでまた俺は逃げるのか。悟飯さんの時の様に、俺に力が無いせいで、あの時も…そして今も…!!』

そもそもなぜこんな目にあわないと行けないんだ、俺はただ皆を助けたかつただけなのに。あいつらさえいなければ、ザマスさえ：人造人間さえいなければ。

……悟飯さんが、父さんが。』

『…もし生きていたら――!!』

そこでトランクスの意識は途絶えた。

ガシャーン!!!!

「！」

突如鳴り響く轟音によりトランクスは目を覚ます。

頭が痛い、どの位意識を失っていたか見当もつかない、タイムマシンのフタを開け辺りを確認する。

見覚えが微かにある部屋の作り、一つのキングサイズのベットで眠る二人の人影。どうやらカプセルコーポレーションの寝室にタイムマシンが突っ込んだ様だ。

激しい頭痛のなか呆然とするトランクスに人影の内の一人が目を覚ましこちらに怒

鳴りかけてきた、その人物の声によりトランクスの意識は覚せいする。

「…おい地球人、このオレさまの睡眠を邪魔するとはそんなに死にたいのか!!」

「…さん？ 父さん！」

「何を寝ぼけてやがる！ ふざけるのも大概に……!? この気は、まさか!!」

トランクスを怒鳴りつけた男、それは自分の命を犠牲にし未来に残ったはずの自分の父、ベジータであつた。

しかしベジータはトランクスに怒鳴りつけている途中で何かに気づきどこかへ飛んでいってしまった。

男はどんどん速度を上げあるところへ向かっている、虚ろだつた目から生気が戻り、いつの間にか全身を金色に輝かせていた。

「どういう訳かは解らんが蘇つたんだな、オレは貴様をこの手で越える事をづうつと待ち望んでいたんだ。」

「必ずだ、必ず殺してやるぞ！」

「カカロツトよ…」